

よしあしのごとは難波のなにならず。波間にやぎる月にこそしれ

○對月綴衣の畫の贊

惠大葛

つゞりさして世のさいはひのたねとなす。あをひと草のあらんかぎりは

○文殊ぼさつの像に

葛

たづねても見まくほしさの心かな。おのがこゝろにあらぬ心を

○長尾の岡雙龍庵に閉關し侍りし比。弟子なるものみな打寄なげきかなしむ

と聞て。しめし侍りし

葛

冬枯はたのみこそあれおく霜の。したに春まつへのわか草

葛

法の水きよくすゞしき心もて。うき世のちりににこらずもがな

○あるとし人の請によりて都に登り住居しけるに。河内なる人々生駒山へは

や歸れよご。ねがひいひこせしかへりごとの消息のおくに

惠大

なげくなよ法の道芝行歸り。わかれぞ逢ふの初めなりける

○雙龍の瀧いかにぞと思ひやりて

たちかへりいつかながめん。縁かへし。わすれぬ山の瀧のしら糸

○人の法語をこひければ。公案をふみて

葛

羊頭を狗肉といへば有漏路より。無漏路にかよふ釋迦も釋迦なれ

○文殊ぼさつの名號のわきに

葛

我も人もたのみありけりおしなべて。こゝろの外の法はあらねば

○不學愚昧なれば名を求る分もなく。炎王の帳にははやく名をうたはれん。大

笑々々

いかなれば入なみならぬ。ちぎりありて。法の悲願にあへるうれしさ

○人の法語を請ひければ

おろかにも遠くぞ外に尋ねけん。心のうちにありしさとりを

ひとの世や來所なし去るもなし。不生不滅のわれならぬかは

佛とは餘所にはあらじふしをがむ。心のうちのまこととはしれ

年月のうつるにつけてみな人のしぬることなき世こそたのしき



葛

我法は深山のおくのさくら花見えぬ色香を身の春にせん

惠大

さとりとはいかなることをいふやらん。こちがしらねばそちもしるまい

惠大葛

禪定は修する心の外ならじ。園にくむ水野邊につむ花

○達磨の繪の賛に

葛

このわろのうなづくまではじつと見よ。末生已前の面目はそれ

○一見阿字五逆消滅すといふ文を書いてそのわきに

葛

我道はむかしも今もかはりなく。雪はしろたへ花はくれなる

○普賢ぼさつ名號のわきに

葛

法の月この日本に照りそひて。ながきやみ路の道しるべなり

○ある和歌を人のうつしておくりけるを納め侍るとて

千早振神代のまゝのここの葉や。いかでたがはん法の道にも

○人のもとより來ける文を封じ置侍るとて

惠大葛

木がらしのふきしくまゝにかきあつめ。なのみありそのもりのここの葉

葛

○人の子のなき跡に朝がほの花さきけるを見て

誰もみな袖ぬらせとや朝がほの花より先に消ししらつゆ

○たらちめの忌辰といふ日に讀て奉りける

葛

歸り來ぬ道はしれごことにつけて。さらぬわかれの後のくやしき

○草庵のほとりにたれかすておき侍りしなでし子の花をとりて佛に奉ると

て

葛

すておきし主はしらねご諸ともに。佛の種やなでしこの花

○風りんにつけ侍る

しばしこのひゞきたゆやと聞がうちに。また音たつる軒の夕風

○或人蓮の繪に賛をこひければ

水のおもにごらぬ花の咲いで。げにたぐひなき池のはちす葉

○金輪佛頂尊の開眼をこひければ。其賛に

いつまでも世は末ならじ朝なく。出る日かげを見てもしれかし



○尋字の開眼をこひければ折から

大君の恵みあるよの世にもげに。正しき法の道のひとすぢ

○天神の名號のわきに

ねがはくはあら人神もしろしめせ。御法を守る心づくしを

○安永三年夏の初より京都にて袈裟の會の結制あり。諸の尼衆あつまりければ

法の友ひとしき道をふみも見よ。おのが心にへだてなき世を

○おなじ會所安居日數の牌に書つく

むすぶてふ法の日數のほごをへて。長くみだれぬ糸すぢもがな

○又阿難尊者の名號の贊に

うごきなき世々の御法のはし柱。たへてしあごを渡しそめける

○又摩訶波舍波提比丘尼の名號に

世を海の海士の小舟の棹さして。きよくぞ渡る跡をしたひて

○人のこひにて十善是ほさつの道場といふ文を書て

たづねてはもこの道にぞ歸りける。人のひとたることをしりなば

○戒波羅蜜の梵文 *戒波羅蜜* 其脇書に

まもれたよる岸もなき海のおもに。うかむふくろの洩れぬ教へを

○觀世音ぼさつの名號のわきに

露の身を法のはちすにおきてこそ。ちかひの海のかぎりともなれ

○四分律戒本の奥に

せめて世にひとりふたりの人もがな。たえく残る法の玉緒

○普賢行願讚梵本のおくに

法の道しるべきやけき月をよきて。やみどもしらでたごりゆくかな

○有馬湯の山に余田了溪といふ居士あり。手づから寫せし戒經の奥書をこひ侍りし。老の身のねがひかなへよ露の間も。しらぬ命のおもひ出にせん。ごありければ。大師善見論に。戒はこれ佛法の壽。戒住すれば佛法世に住すといふ



文を思ひいで、

水くきの跡はたがへじなえにしありて。法の命のたへぬ契りを

○道の歌とて

もどよりもすぐなる道をおろかなる。心とまよふ人の世中

○葛城山にありし比

葛 軒ちかくなきふるしても老らくのみ、にはうとき山ほとゝぎす

○自像の賛に是は郡山の太守君の所望也

惠陪拾

世にありていま幾年か老が身の耻をもしらぬおもかげぞ是

○見骨及鬲體を

草も木も袂もおなじおく露をよ所にやは見んあだしの、秋

○葛城山高貴寺にて

葛 葛城やよ所の詠めもかくはあらし雲もかすみになびく明ぼの

○高貴寺讀し歌

惠陪葛

春秋になれても馴ぬ詠めかな。たにのどぼその明がたのそら

○梅の畫の賛

雨風はよしふかばふけ色もかもよそにちらさぬ梅の花笠

○佛の賛

御佛のひかりをおのがこゝろにて。むねのかゞみのくもりあらずな

老師とし頃よませ給ひける歌どもを寫あつめて一まきとなしぬ。實に九牛が一なり予はいしみるに。かなへるもあり。又ははむるゝもあり。又は歌ともみへぬあやしき事どもかきつゞくも。そのまゝの面影をとどめんと思ふが故なり。これはいせん人。よく其大器大用あるをしるべしと云々

弟子 飲明謹書

編者曰。右慈雲大和上御歌一卷は尊者御作の和歌一百三首を收む。尊者の俗弟



子飲明居士和州郡山城主柳澤甲斐守堯山保光公の集むる所なり。飲明居士直筆の正本高井田長榮寺に在り。梵文等往々に朱を以て書改む。是れ明堂和上の直筆と見えたり。今彼本に依て之を出す。高貴寺所藏の慶應四年戒心和上書寫の本。及び明治二十七年開版の活字本慈雲飲光尊者詩歌集に比するに少異なきに非ざれども。彼は既に轉寫の本。此は是れ根本の正本なり。彼本の今に異なる者は皆寫誤に屬す。故に専ら此を用ひて彼を用ひず。此中「とふ人もあらしの庭」の歌右傍に細字にて記せるは原本には飲明居士直筆の朱書なれば。居士の添削と見ゆ。

此集に載する所の和歌一百三首の中。御詠草に出づるもの二首。惠日尼の集めたる雙龍大和上御歌に出づるもの十八首。大和上様御尊詠に出づるもの十六首。皓月尼の集めたる大和上様尊詠に出づるもの三首。葛城尊者和歌集に出づるもの四十二首あり。今皆冠頭に標注す。

此集の外題に飲明居士直筆にて故大和上御歌と記されれば尊者御遷化後

に集められたること明かなり。隨て年の暮の御歌に「八十年もあまりなるまで」といふ句見えて。八十歳已後の御歌も有ること勿論なれども。製作年月の明なるものは。寶曆五年尊者三十八歳の御作を初とし。安永三年五十七歳の御作を終とすと見えたり。



雙龍大和上御歌

式叉摩那 惠日集

○法の御歌とて

草大皓

こゝろともしらぬこゝろをいつのまに我心とや思ひそめけん

○題同上

草大

これやこのさくらぬさきの悟こそまだ迷みぬ迷なりけり

右一首尊者御眞蹟大阪市一瀬爲三郎氏所藏。達磨の畫の賛なり

○題同上

大

法性はむなしかりけりうかりけり恨めし戀し嬉しねたまし

○思想多き人に送り給ふ

大

何事も思へばくるしおもはねば思はぬまゝに思はざりけり

○同

飲大

身をおもふ心こそまづ此世より身をくるしむる心なりけれ

○寶曆年中弟子終り侍りける

大

法の月久しくもがなと思へども小夜ふけにけり光りかくしつ

○同年春法隆寺に詣給ひて

大

いかるがやとみの小川の今もなをくみても清き流ならずや

○人よりそしりを受て詠給り

草大

ほめばほめよそしらばそしれ諸ともにあるかなきかのわかなくの世に

○山住の心を詠じ給り

世をいとふ心だにせず法もなく非法もなくて日を過るなり

○同

草大皓

かくまではおもひよらずもやま住の庭の月影軒のしら雲

○同

大

山住のかいぞありけり初雪やほごふるまゝの谷の通路

惠日尼集雙龍大和上御歌



草大 ○寶曆八。長尾に庵を結び給り  
法のえにしむすぶもしるし水清み。流れ長尾の瀧の白糸

○同

大拾 たづねずばありともこゝに山鳥の。長尾のおかの瀧のしら糸

○同

大 春の日のいとゞ長尾の瀧つ瀬に。聲うちはへて山鳥の鳴

○同

大 おく山にあらぬ住家もなか／＼に。世にすてられし身こそやすけれ

○同

大 繰かえし見るに千草の色に出て。そむるぞつらき瀧の白糸

○中春の比風はげしう雪ふりけるに

大 問人も嵐の庭にたれぞかく。花もてちらす春の山すみ

大 問人もあらむつらさも中々に。山田もる身は嬉しかりけり

○ふもとの寺に住給ふ比

大拾 枯れ残る長尾の岡のすゞきはら。霜もしらけていとゞさむけき

○同

草 薪木ともなしなん身ぞとおもほへて。あだし心をこりぞはてぬる

○同

草大 瀧の音にしらまし物をけふもかく。世に有ふれし春にぞ有ける

○年の暮に詠給ふとなん

大 年のおもふことぞ悔しき今日もなを。あなあやにくの我心かな

○蓮の露を詠給となん

大 有漏の身は草葉にかゝる露なるを。やがて蓮にやどりさりけんなカ

○禪帯に書付給となん

大 とけばとけ結ばゞ結べ一すぢに。受にし法を思はんとぞおもふ

○寶曆五長榮寺の堂の棟に書付



大 しめゆひし法のちぎりを千早振神の御國のあらむかざりは

○同堂供養日神祇に奉るとて

草 千早振神し誠の神ならば此國まほる法ぞ法なれ

○人の父母の像を畫て贊を願に

大 面影を千代に傳へて父母の。有し教の道守り見よ

○或人の經中に藤つるをよちて井の上にかくれしいんえんを畫て贊を請しけるに

大 餘所のことゝ思はねど猶いたづらに。今日も繪を見る心成けり

○自性離言説と云心を

飲大皓 葛拾 この比は峰の木がらし吹たえて。木末に残ることのはもなし

○面壁達磨の贊に

葛飲大 世の人の見るやいかにと徧界に。かつてかくさぬ己が面目

○あきの述懐

草飲大 世を秋の露ときえまくおもひ出に。月やあらぬと詠めてぞふる

○佛涅槃忌に詠奉り

草大 こりつみて猶いかにせむそのかみの。けぶりたへにし夜半のなげきを

○山住のこゝろを詠給ふとなん

大 心ある人の住ばや峯つゞき。雪ふりうづむつたの細道

○同

大 夜やいかにかざり浪間に出るとも。入ともわかぬ月の海つら

○題不知

大 月の國の文見まほしく思ひ出で。道ある御代の恵みをぞ待つ

○同

大 いかにしていかにしらせむ法の道。ふみたがへたる世の人のため

○山住の時。時鳥を詠給ふ

大 柴の戸をかれなで來鳴ほとゝぎす。世を卯の花にすみやわびぬる



飲大

ほととぎす世を卯の花に住やわびぬ柴の戸ぼその明暮になく

○同上

○同上

大

草深み道ふみまごふ岡をだに。しるしかいなき夏の山かげ

○人の法語を願ければ

大

大道は直きを己が姿にて。みぎり左のわづらひもなし

○同上

大

慢の修羅いかりの蛇をはらひすて。慈悲こそもとの姿なりけり

○

大

見ると聞とさもあらばあれ春ふかみ。谷のうぐひす花の月影

○下に鉢を畫てその賛に

大

ひたすらにふすばらし見よ白鉢の。孔雀の咽の色となるまで

○或人正覺尊の開眼を願ければそのうらに書付給へり

大

御佛の光りそふらし名にしおふ。此日本の八千代萬代

○人の四十あまりの賀をしけると聞しめして

飲大

さざれ石のこけむすためし。君もこの長尾の瀧のおとづれに聞け

○人墨蹟を願ければ打弄り其わきに

飲大

法の水ありし流の盡せねば。昔を今に見るよしもがな

唯正可丁(四)其わきに

飲大

見てもしれ朝な夕なに色そひて。千代もかはらぬ花の面影

其(何)其(何)其わき書に

大

海の月山の櫻を其まゝに。馴にし君が姿をぞ見る

○高雄山に安居し給頃

禪定迎朝日 經行送夕陽 微身荷大法 迢迢守繩床

このわきに書つけ給へり

大

忘れても色にな出そ時や時。長くもちぎる峯の紅葉々



○風荒き日諸神に法施し奉るとて

大 神垣や禱るしるしのほごもまた草木のべふす秋の山風

○利勝尼御壽を祝奉るとて

御手に持し花の香さそふ春風にあまねくなびく法のわか草

大和上より御返し

大 みせばやなありしむかしの親父めが子供ちよらかす花の色香を

○

大 み吉野の吉野の山の山櫻花こそ花の主なりけり

○法の御歌とて

大 一切衆生へだてぬまゝに聞このいらぬが法のおとづれぞかし

○同上

飲大 娑婆に居て娑婆のやうなき身にしあれど娑婆ながら見よ娑婆にぞ有ける

○或僧御名を世に残し給へど願に

飲大 此世には名をもとゞめじ彼の國に人待人の有るとやはさく

○又

大皓 彼國の池の蓮の上ならで浮世の中の名こそおしけれ

○壽

大 本來の生れぬまゝの心にて千歳の紅葉萬代の花

○萬

大 萬寶の主をたぞと人間はゞたる事をしる身にこそ有けれ

○諸宗の趣を詠給となん

草大 西ひがし左り右りの道と道此秋津洲の外ならば外

○徳山禪師の畫に賛を願に

大 うちつけに誰にか見せむ山櫻嵐にちらぬ花もある物を

○天神の御名號のわきに

大 家の道たがひしなくばひとすじに守るぞ神の心成けり



○文殊菩薩の名號のわきに

大 海も山もさもあらばあれ一步たゞ蔘直の法の道しは

○大工法語を請しける

大 家の道むかしを今に還しひくすみかねとのみ法をたのみに

○郡山の家中富松華玉子石印を彫み奉りけるに

大 事にふれてふみもたがへじ武士のげに世をまもる道の一すじ

○

大 何事も人なみならぬえにしあらば唯一すじのたのもしきかな

○忍の字の心を詠給となん

大 花にそひ月にともなふ人心こゝろの外の御法ならねば

此御歌忍の字の心いづれにか侍るぞやと問人ありければその御答に花と

月とは人の賞翫するところなり人の心を寄る所なり花にそひ月にともな

ふ心を以て諸人萬事にまじはるべしたとひ心に叶ぬことありともみな我

心のすがたなりと

○鶏の畫に賛を願に

大 世をすくふ御法もそれよ木綿づけの鳥だにおのが時をしる物を

○法語を請しけるに

大 日も暮ば道たゞし法の道遠くはないぞいそげたび人

○同上

大 我法は門田のいな葉としありて穂なみ立そふ秋の初風

○

大 寂靜はあられふきまくまごの外になれしふするの床の小むしろ

○安居日數の牌に書付給と

大 たまさかに逢にし道し道なれば隙行駒におくれじと思ふ

○よしの畫に賛を願けるに

大 よしあしのことを難波の浦づたい去年のきのふの宵の秋かせ



○長尾紅葉の折しも詠給ふ

大 白妙の浪も木の間<sub>に</sub>秋ふけて紅葉にまがふ淡路島やま

○對月綴衣の繪に贊を願に

飲大葛 つゞりさして世のさいはいの種となすあはひと草の有むかざりは

○文殊菩薩の名號のわきに

大 たづねても見まくほしさの心げに己が心にあらぬころを

○雙龍に閉關し給へば弟子打寄かなしむを聞しめして御示の奥に此二首を詠じ給ふとなん

大 冬枯はたのみ有けりおく霜のしたにつのぐむ春の色香を

大 法の水清くも清き流なれば代々の契りのにござらじと思ふ

○人の請によりて都に住居し給へば河内なる人々生駒山へ歸らせ給へと願ければ尊書のおくにかく詠じ示し給り則此三首なり

飲大 なげくなよ法の道芝行歸り別れぞ逢の初めなりける

大 思ひ出て都の春のにしきにもかへぬ生駒の峯のしら雲

大 詠めやり思ひ出ては繰かへし實にもわすれぬ瀧のしら糸

○法語を願ければ

草大 羊頭をかけて狗肉を有漏路より無漏路にかよふ釋迦も是々

○文殊菩薩の名號のわき書に

大 我も人も頼ありけりおしなべて心の外の御法ならねば

○不學愚昧なれば名を求る分もなく炎王の帳にはやく名をけし候や本意に侍となん

大 嬉しさは人なみなならぬことごとくにわきて悲願のある身ぞと思ふ

○人の法語を請しけるに

大 思ひ出て遠や外にたづぬらむ心のうちの法の道路は

草大 見る色の來處なければ去處もなし不生不滅の我ならずして

佛とは餘所にはあらじふしをがむ心の内の玉としらすや



大 本よりも一物なくば取に盡じ。山に金あり海に玉あり

草大 年月の移るにつけて諸人の死ることなき世こそたのしき

野邊に生る草にはすがたありのまゝ。風こそ法の臺なりける

草大雙 草も木も己が姿のありふりて。物いふことのいらぬ世の中

大 我法は深山のおくの櫻花。見えぬ色香を世の春にして

大 見る人の心ながらも春はげに。柳のみどり花のくれなる

飲大 悟とはいかなることをいふやらん。こちがしらねばそちもしるまい

大 だまれたい法も非法もうちすてゝ。物いふことのいらぬ世界に

大 是に習へ生そめしより死ぬるまで。物いふ事のいらぬ斗も

已上十二首法の御歌とて

○達磨の賛に

このわろがうなづく迄は坐りみよ。未生已前の眉目いかにと

○同

大 禪定は落葉の山の山おろし。あられふきまくまごの小夜中

○同

飲大葛 禪定は修する心の外ならじ。園にくむ水野邊につむ花

○一見異字五逆消滅のわき書に

草大 我法は昔も今も色かへぬ。雪の白妙花のくれなる

○普賢菩薩の名號のわき書に

法の月この日の本に照りそひて。ながきやみ路の道なくもがな

○和歌の書を人の寫して奉けるに納め置くこと

草大 言の葉も千早振てふあし原や。ふみもたがはぬ法の一道

○來書を封じ給とて

飲大葛 木がらしのふきしくまゝにかきあつめ。名のみありその森の言の葉

○人の子のなき跡に朝がほの花さきけるを見給ひて

大 誰もみな袖ぬらせとや朝がほの花。先に先だつ今朝の白露



○御たらちめの忌辰といふによみて奉り給ふ

大 歸り來て見まくほしてふことにつけて。さらぬ別の後の悔しさ

大 ○庵のほとりに棄おきしなでしこの花を取て佛に奉るとて

大 捨おきし主はしらねど諸共に。佛の種としむるなでしこ

○風鈴に書付給ふ尊詠

草 今しばしひゞきたゆやと聞がうちに。亦なりすさむ軒の夕風

○或人蓮の畫に贊を請しければ

大 池の水にごらぬ花の色をまして。げにも世に住かいぞありける

○金輪佛頂尊の開眼を願に

大 いつまでも世は末ならじ朝な／＼。出る日影の影みてもしれ

○孝字の開眼を願に其贊

大 大君のめぐみ有世の世にもげに。正しき法の内の人々

○天神の名號のわきに

大 願くはあら人神のしろしめせ。御法を守る心づくしを

○安永三夏。京にて袈裟結制の時詠給と

大 法の友等しき道をふみも見て。己が心にまかせずもがな

○同安居日數の牌に書付給と

飲大 結ぶてふ法の日數のほごをへて。長く亂ぬ糸すじもがな

○阿難尊者の名號のわきに

大 動なき世々の御法の橋柱。たえてしあとを渡してぞふる

○摩訶波舍波提の名號のわきに

大 世を海の海士の小船の今もなを。清くぞわたる跡をしたふて

○十善是菩薩の道場と云文を願ければ其わきに

大 たづねてはもとの都のかいぞある。人の人たる道の道しば

○正覺尊の贊に

大 たのみある身にぞありける月の國の。光りを添る日の本の世々



○ 守れたゞより所なき海の面に。浮ぶ袋のもれぬ教を

大 守れたゞより所なき海の面に。浮ぶ袋のもれぬ教を

○ 観音の名號のわきに書付

大 露の身を法の蓮におきそめて。ちかひの海の限りともがな

○ 魚をやしのふ書の贊

大 さかふなよ池のみぎわの浪々も。心の水のすむにまかせて

○ 四分戒本の奥に

飲大葛 せめて世にひとりふたりの人もがな。たえくゝ残る法の玉の緒

○ 行願贊の奥に

大 法の道常にさやけき月もあるに。やみとや人の目をふたぎ行

○ 戒は是佛法の壽と云心を

大 縁かへしながくもがなと。禱りいのる。三世の佛の法の玉緒

○ 有馬湯山に余田了溪と云居士あり。手づから寫せし戒經の奥書を願奉りて

老の身の願叶よ露の間も。しらぬ命の思ひ出にせんと云ければ。善見論に戒

は是佛法の壽戒住すれば佛法世に住すと云文をおぼし。又居士護法の願心

もなきにあらねば其御返しに遣し給ひけり

大 朝なくゝおき添ふ露を見てもしれ。法の命のたへぬちぎりを

○ 法の御歌とて

皓大 もとよりもすぐなる道をとやかくと。思こゝろにまごはされ行

○ 葛城にて詠給り

嶺ちかく結し庵も老の身の。みゝには遠き山時鳥

○ 和上自贊に

飲皓拾 世にありて今幾年か老の身の。耻をもしらぬ面影ぞこれ

○ 骨散するを見給て

草か木かあらぬか露のおき添つ。夕暮深きあだしのゝ秋

○ 葛城山高貴寺にて



大 葛城は餘所のながめの雲井かは霞たな引明がたの空

○五徳十數略語の表紙に

法皇の藏の戸開きかぞへ見る。先や三十七の品々

○葛城山にて

依暗葛

春秋に馴ても馴ぬながめかな。谷の戸ぼその明かたの空

○人の法語を請しけるに

雙

白雲と月と櫻と見るまゝに。萬代盡ぬおのが春秋

○七十の時老苦を詠給

何事をなすべき身かどすてし世に。有ふる年の數積り來て

○高貴寺にて

皓

遠近はそこともわかす目にふれて。見るにしたがふ嶺の紅葉々

○同神前に劔を納給とて

大葛戒

葛城や雲いる峰に跡たれて。長くも法の守りともがな

大 我民は世々にさかえんあめがした。めぐみに盡ぬ富を守りて

○

大 諸人の千代をかさねて仰見る。名さへ高野の山の面影

○十善法語を石室に納おくと云こゝろを

大皓 動きなきみ世のしるしの法の雨。もらぬ岩屋に猶祈るなり

○戒學要語の奥に

大 傳こし法の水かめ水清く。にごさじと思ふもらさじと思ふ

○出山釋尊の贊

大戒

月しろき道はさながら其まゝに。思ひ入さの山の面影

○忠義の心を詠て遣し給ふ

大 何事を君がためとや思らむ。我が私を忘れはてゝは

○つゝじの木を榊稚に造せ給ひて



大 千代經ぬる深山のつゝじ今よりは盡せぬ法の聲を傳へよ

○草中に畜生の走る畫の賛

大 有情非情同時成道と聞ばげに嬉しくも有るか法の友ごち

○米石を奉りければ

大 ならべおく俵の數のいつまでも盡せずまもれ法の命を

○

大 雨ふるや否と問も頭より足にいたるの御法なりけり

○長榮寺出火の後詠給り

皓 燃る火に心をへしは忘られて聞もいそはぬ軒の松風

○同火中に金剛線を捨て

皓大 火もやかぬ法の糸すじ縁かへし三世の佛のちかひをぞ思ふ

○天明五秋の初浪花某施餓鬼のはたを捧けるに五如來の名號を書給て其う  
らにかく詠じ書付給となん

南無寶勝如來

葛増 月の色花の香ごとに思出る世に住わぶる人も有てふ

南無妙色身如來

葛増 我法は松吹風のおとづれて軒にさやけき峰の月かけ

南無甘露王如來

葛増 草も木もげに御佛の心とて世々にたがはぬ己が春秋

右三首尊者御眞蹟高貴寺所藏。但し佛名なし

南無廣博身如來

身にそひてそれかあらぬか萬代□限りしられぬ君がめぐみの

南無離怖畏如來

海の外山のあなたをそのまゝにふみもたがはぬ法の道路は

○渡唐の天神の賛

手に持し梅の色香を其まゝに餘所なる國の風に傳て



皓 ○天明七夏錫杖のえに

皓 露の野邊霧の山かけ行かへり。ともなふ法の道のひとすじ

皓 ○同八京にて火人の照を聞給て

皓 火宅とは思ひながらもいねがての。夢驚かす風のおとづれ

皓 ○同申年五十夏滿の日詠じ給ふ

皓 年月は身のおこたりの姿にて。五十の夏もいたづらにすぐ

皓 ○同

皓 教ある法の月日はそれながら。老の耻そふ年の數々

皓 ○渡唐の天神の賛

皓 海の外山のあなたも覆いおほふ。袂にかざす梅の花がさ

皓 ○大和上尊影の賛

皓 幾千歳吹風すゞし水清し。ともなふ山の動きなき世に

皓 ○神農の繪に賛を願に

皓 海の外道もたがはじ我國の。少な彦名の神のこゝろに

皓 ○天明七の夏破戒の人を誠め給て

皓 垢つけばとる手もたゆく洗はず。つゞりの衣糊たちをせよ

皓 ○天明五夏馬山にて印明を傳へ給ひて印義を詠じ給ふ

皓 御佛はかく御心に思ひ思ふ。迷に迷ふ世の人のため

皓 ○

皓 忘るなよ我が大君の御代ぞげに。夜ふくる雨の萬代を経て

皓 ○寛政八の春梅の畫に賛を願に

皓 春雨のふりつゝ。夜半の色と香を。餘所にもらすな梅の花がさ

皓 ○寛政八年秋の頃浪花の某東方朔と浦島太郎と三浦の大介とを畫して賛を

皓 願に

皓 ところはに榮久しき家を見よ。世の壽の數をあつめて

皓 ○浪花廣岡氏の庭に二もこの松の繪を書て賛し給へと願けるに



庭の面にうつし植ては千代を千代みどりぞ添るふた本の松

○猿の子に乳せる書に贊を願に

思ひ見よ木つたふ猿の親となり子となる道のかくぞあるべき

○古人の手にうちはを持書の贊に

山の端にかくれし月のそれながらたへず友なふ夏の夕風

○ひやうたんでなますを捕ふる書の贊

見やいかにうきもつらきも嬉しきも此たとへなるあだし此の世に

○享保元夏依入願佛の字の贊に

佛とは誰か教て白糸の染てかいある世のならひぞと

○

蓮葉のにごりにしまぬめぐみぞと見るにかいある花の一本

○

天の御蔭日の御蔭とて幾萬動きなき世の高千穂の峰

皓

○羅漢の書に贊を願に

我國は寶<sup>の</sup>なりけり動きなき世々の守りの影をとめて

○葛城の本阿彌陀堂の宰主式又摩那惠日と云尼の方へ御齒の落給ごとに贊

詠を添させ給て御送有之ける其一には御詠なく其二

落そふるこの葉の秋のおとづれに又こん春の近きをぞしる

其三

吹さそふ風のたよりにことづて、秋より先に落る葉ぞ是

其四

深山木や枯行まゝに年を経て春をもわかず落る木の葉ぞ

其五

ことほりよ落る木の葉の數も添老その森の冬枯の頃

其六

世を秋のふけ行まゝに木がらしの。一葉くくと吹さそふなり



其七

冬枯に嵐吹たゆ木のもとは何といふべきことの葉もなし

八九は御詠なし其十

身にぞしる一葉くくの枯落て時しもわかぬ秋の氣色を

其十一

身の秋は時しもわかず夏木立しげる頃にも葉の落るなり

其十二

老の身は時しもわかぬながめにて夏の初も落葉をぞ見る

其十三

秋の末冬の初のならひとて落くさなりし木葉なるらし

十四は御詠なし其十五

身の秋は深を告る一葉かな時しも冬を向ふ嵐に

十六十七十八十九廿は御詠なし其廿一

木すへには残りすくなの葉なりけり霜ふり月の弓はりの頃

寛政三。三月十五日齒の落給に

時しらぬ深山の檜の葉なりけり八重の櫻の花開頃

廿三廿四廿五御詠なし廿六寛政十二庚申の年九月初旬京都より寫詠に添

給て

今は唯残る一葉を頼にて木末淋しきなが月の頃

寛政年中癸丑 九月十二日御齒の落給にかく詠じ給て忍瑞律師へ送り給と

木葉ちる秋の日數も諸ともに残りすくなき身のよわいとや

已上十五首御齒の歌終

○京寺の晝の蚊 今年のこまり八景とて詠給

風たてるおりこそかれもまだき蚊に忍びかねてはござす櫺の戸

高井田の道の露

しづのおがこゝろごとにやあく小田野穂なみとうとはおける白露



雙龍のむらざり

時の間にうつるけしきはおもほへず衣手しめる谷のむらざり

小僧たちのうた

秋の露玉にもぬかむ思出て軒端に結ぶさゝがにの糸

晩年僧の我慢

谷川のもとの流としらねばや岩ほにむせぶ瀬々の白波

文盲のそら見解

蚊やり火も時こそはあれ春秋をそこごとなくすだく聲々

愚癡の教相

法の海濱の真砂の数々に心をくだく宵のうら浪

寺院の貧窮

紅葉の色を木末にきそへども嵐にたへぬ霜枯の枝

○

稽首遮那理智身 護持賢聖護法神 塵刹塵劫非起滅 本地風光無限春

文化甲子三月 不空如来

右自贊に

○

葛増 千早振神のこゝろのそのまゝをすぐなる御代の千歳にぞ見ん

○金胎曼荼羅の箱のふたに書付給ふ

増拾 御佛は盡せぬ法をそのまゝにいたらぬ處なき姿とて

○尊影自贊に

鐵塔相承有由來 葛嶺白雲時未休 珍重人世千萬古 青眼母願滄海秋

丁季秋

慈雲叟

○雙龍庵にて詠給となん

拾 思ふげにやみにはあらし長き夜のねぶりさませと残る月影

○七十の春詠給と

惠日尼集雙龍大和上御歌



今よりは少事少業少希望。彌勒大士もゆるせ我身に

○同

白玉は人にしられずしらすとも。よししらすとも我ししれらば

右一首は萬葉集の歌なり

○述懐

誰か又はかなき跡に思ひけむ。昔を思ふ夜半の袂を

○

思ひけるむかしをそれとわきかねて。小夜ふくるまゝの軒の月影

○風鈴の御歌に

鈴の音や己がしらべを其儘に。そよ吹風にさそはれてゆく

○寛政二。心を師とする事なかれの教の心を

山陰や道のぬかりのほど遠し。手馴ぬ駒に心ゆるすな

○同三春。普賢行願讚に

過去はげに未來は盡じ限りなき。衆生世界を此身とはしれ

○天明六。十二月二十三日河州へ御下向の折船中にて時雨侍しとて尊書奥に

時しわかす霞まじりに時雨けり。生駒の山の雲さそい來て

○同七年四月尊書の奥に仰遣されし尊詠。半陀伽尊者龍を降伏し給ると。豊干

禪師の虎に友なふと二幅對の賛

半陀伽尊者に

そらに住たつとや人はなづくらむ。馴て身に添ふ千代の雨雲

豊干禪師に

吹風にうそぶく聲はそれながら。枝をならさぬ御代の友ごち

○達磨大師の賛に

九年まちしかいもある哉。小夜ふけて。まじろにうづむ谷の白雪

○鯉子の賛に

我法は汀の萩のおとづれて。袂すゞしき秋の浦風



○君たる道と云心を詠せ給ふ

國の風ふきもとどめすもろともに。守るも神のめぐみならずや

○懶瓚の賛

我宿は人の問くる詠かは。木葉にうづむ谷の細道

○弘法大師賛

萬代も曇らぬまゝに諸人の。仰ぐ高野の嶺の月影

○中尊は佛世尊なり是に

正覺山前夜夜月 尼連禪河春秋流 三千年後見也未 東海摩訶羅比丘 飲光

○靈照女の賛に

阿爺折花去 媽媽友月休 歸路何處是 明明百草頭

○法滅の相あらはれし折法式相改めまもる心を詠せ給となん

千代の竹みごりを法のたとへにて。其ふしぐのまもりをぞ思ふ

○大神宮を信する人の染筆を願に

皓

我國のすぐなる民を心にて。吹もとどめぬ代々の神風

○十一月五日尊書の奥に線香立に書付給とて

皓

一すじの烟を法のしるしにて。四方諸國を思斗りも

○天明八。人法語を請しけるに

解脱とは己が姿に生れ來る。松の條々竹のおきふし

○河内國寺元村ノ誤カかたへ村の長者。龍の尊詠を請しけるに

草皓

分のぼる雲井を己が姿にて。田ごと涼しき夕立の雨

○寛政二春。浪花廣岡氏某硯宮に文章を書給へと願奉りけるに

硯匣いんげん是古株之製也。古株ふるき何木なにき何謂なにをいふ難波津梅也。難波津梅なんばつばな株葉相推きばあひま千年敷榮せんねんふき。吾

國之大觀也。斯為廣岡氏不忘本之懷云

皓

むかし今しる人ぞしる難波がた。ありし色香に咲やこの花

○

皓

いたづらに過しける哉四十あまり。八てふ夏の法の數々



皓 ○君たる道と云事を

皓 十の道たがはぬ民をこゝろにて。世々吹傳ふ伊勢の神風

皓 ○述懐

皓 恨べき我こゝろかなはかなくも。世にありがほに今日も暮しつ

皓 ○新死

皓 ことの葉は松の千歳のそれながら。昨日にかはる今日の面影

皓 ○可憐可憐

皓 三千とせの春を傳て色かへぬ。柳のみどり花のくれなる

皓 ○新可憐

皓 皆人の元の住家とおもほえて。ながめ盡せぬ山の面影

皓 ○行願賛奥に

皓 性鈍の口字もそこともわかぬ身の。口字書殘すえにしとぞ思ふ

皓 ○

皓 三千歳にふみもたがはぬ道しあれば。幾萬代のまもりごもがな

皓 ○高井田方丈を造らせ給ふ

皓 妙ならば世々のやみぢを照せかし。ありし毘耶離の軒の月影

皓 ○天明四。三月十五日洛西川勝寺村長福寺本尊の開眼を高井田にてつとめ給

皓 ぶ

皓 へだてなき光りをそれとふしおがみ。こゝを常在靈鷲とぞ思ふ

皓 ○同四月高井田より

皓 たがふなよ佛の道のへだてなく。むれさそい行法の人々

皓 ○長榮寺方丈のいろりに

皓 とことはに折たく柴の夕けぶり。残る齡を身の内にして

皓 ○安永三年九月四日馬山桂林寺より洛西長福寺へ賜る尊詠

皓 有馬山いなわたり。の秋ふかみ。なを立かくせ軒の夕ぎり

皓 ○天明六。六月に詠せ給となん



皓 四十あまり七の數をかぞへ來て。結し夏も中過ナカガゆく

○尊影自贊

皓 世にありて今いく年か老の身の耻をもしらぬ面影ぞこれ

○平砂落雁

繪にうつす文かごぞ見る磯づたひなびきて下る雁のむらく

瀟湘夜雨

皓 今もなを忍にあまる袂かな。染てし竹の雨の小夜なか

江天暮雪

夕暮や磯うつ浪の音たえて汀につゞく戸間の白雪

漁村夕照

夕日さす此面彼面にほすあみの影うちまじへなびく浦風

山村晴嵐

今まではそこともわかぬことづくに。市女磯男いそぎ行見ゆ

洞庭秋月

皓 海の面空もひとつにきり晴て。ふけ行まゝの秋の夜の月

遠寺晚鐘

うち出て詠やるまの今もはや。かすみに傳ふ入相の鐘

遠浦歸帆

かすみわたる浪間をわきておそくこく。真帆引歸る風のおちこち

右唐土の八景を詠じ給ふ

○愚路行掃

皓 朝夕にちりもとどめじおのづから。清きを元の面影にして

○鍵茶 釜蓋に

したふにもあまりあるなり過し世の空に先立法のしるしを

○雪峰 枚子

皓 世の人をすくいもらさぬいゝかひのいふかいもある法のちかひぞ



上來二百八首の御歌并に二首詩は式又摩那惠日曉堂謹拜聚

編者曰。右雙龍大和上御歌一卷は尊者の御弟子曉堂惠日式又の集むる所にし  
て。尊者御作の和歌二百四十五首及び詩四首を收む。朽木縣鷄足寺小林正盛師  
所藏の雙龍遺稿と題する古寫本の中に此の集を載せたり。今彼の古寫本二種  
に依て之を出す。此集元と題なし。今私に題を設けて雙龍大和上御歌といふ  
惠日式又の奥書に「上來二百八首の御歌并に二首詩」とあれども今は歌二百四  
十五首詩四首あり。如何なる故にや。其のよし詳ならず  
二百四十五首の中。御詠草に出づるもの十七首。飲明集に出づるもの二十首。皓  
月集に出づるもの五十首あり。皆一々冠頭に標注す

### 大和上様御尊詠

編み人しらす

○法の歌とてよみ給へり

草惠皓 こゝろともしらぬ心をいつのまに。我こゝろとや思ひそめけむ

草惠大 これやこのさくらぬ先のさとりこそ。まだまよひ見ぬ迷ひなりけり

右一首尊者御眞蹟大阪市一瀬爲三郎氏所藏。達磨の畫の賛なり

惠 法性はむなしかりけり。うかりけり。うらめし戀し嬉しねたまし

○思想多き人によみてあたへ給ふ

惠 何事もおもへばくるしおもはねば。思ぬまゝにおもはざりけり

飲惠 身を思ふこゝろこそ先この世より。身をくるしむる心なりけれ

○人よりそしりをうけてよみ給へり

草惠 ほめばほめそしらばそしれ諸どもに。あるかなきかもわかなくの世に



○山住のこゝろをよみ給へり

世をいどふ心にせで法もなく。非法もなくて日をすぐすなり

草惠皓

かくまでは思ひよらずも山すみの庭の月影軒のしら雲

惠

山住のかひぞ有けり初雪や。ほごふるまゝのたにの通ひぢ

○寶曆八年のころ

生駒山長尾のおかに御庵を結び玉んとてよみ給ふ

草惠

法のえにし結ぶもしるし水清みながれ長尾のたきのしら糸

惠拾

たづねずばありともこゝに山鳥の長尾のおかのたきのしらいと

惠

春の日のいとゞ長尾のたきつ瀬に。こゑうちはへて山鳥のなく

惠

奥山にあらん住家もなか／＼に。世にすてられし身こそやすけれ

惠

緑かえし見るに千草の色に出染るもつらきたきのしら糸

○中春の比風はげしう雪ふりけるに

惠

とふ人もあらしの庭にたれぞかく。花もてちらす春の山すみ

惠

とふ人のあらむつらさもなか／＼に。山田もる身はうれしかりける

○これはいまだ山居の本意もとげず里寺に住給ふころよみ玉へり

惠拾

枯残る長尾のおかのすゝきばら霜もしらけていとゞさむけき

薪木ともなしなん身ぞとおもほへて。あだし心にこりぞ果ぬる

○としの暮によみ侍る

惠

年のおもふことぞ悔しきけふもなを。あなあやにくの我心かな

○寶曆五亥とし夏の初のころ

生駒山のふもとにて弟子なる御方のおはりとり侍りけるに

惠

法の月久しくもがなと思へども。小夜ふけにけり光りかくしつ

○寶曆六年春の比

大和國法りう寺に詣で給ひて

惠

いかるがやとみの小川の今もなほくみても清きながれならずや

○山住の本意もとげず里寺におはしけるに。人の春のことぶきに來ければ。御



草惠

心のうちにおもひつゞけて

瀧の音にしらましものをけふもかくよにありふれし春にぞ有ける

○蓮の露をよみ侍る

惠

有漏の身は草葉にかゝるつゆなるをやがてはちすにやざらざりなかけむ

○禪帯にかきつけ給へり

惠

とけばとけ結ばゞむすべひとすじにうけにし法をおもはんとぞ思ふ

○長榮寺新堂供養の日神祇に奉るとて

惠

千早振神しまことの神ならばこの國まもる法ぞ法なれ

○父母の像を畫て賛を願ひけるに

惠

面影を千代に傳へてちゞはゞのありし教のみちまもりみよ

○或人經中に藤づるをよぢて井の上にかくれし因縁を忍がきて賛を請しけるに

惠

餘所のことゝおもはねごなほいたづらにけふも繪を見ることゝろなりけり

惠

○寶曆五亥の年長榮寺の御堂の棟木にかきつけ給へり

しめゆひし法のちぎりをちはやふる神の御國のあらんかざりは

○面壁達摩の賛に

葛草飲惠

世の人の見るやいかにと徧界にかつてかくさぬおのが面目

○秋述懷

草飲惠

世を秋の露ときえまくおもひ出に月やあらぬとながめてぞふる

○自性離言説といふことゝろをよみ給へり

飲惠皓葛拾

此ごろは峰の木がらし吹たえて梢にのこることの葉もなし

○佛涅槃忌によみて奉り給ふて

草惠

こりつみて猶いかにせんそのかみの烟たえにし夜半のなげきを

○山住の比よみ給ふとなん

惠

ことゝろある人の住ばや峰つゞき雪ふりうづむつたのはそみち

惠

夜やいかにかざり浪間に出るとも入ともわかぬ月の海づら



○題しらす

惠 月の國の文見まほしく思ひ出て。道ある御代のめぐみをぞまつ  
惠 いかにしていかにしらせん法の道。ふみたがへたる世の人のため  
いつも見よ法の色香のそみ出て。風にたはむる蘭の花

○人の法語をねがひければ

惠 慢の修羅いかりの蛇をはらひすて。慈悲こそもとのすがたなりけり  
惠 大道は直きをおのが姿にて。みぎりひだりのわづらひもなし

○山住の時。時鳥をよみ給へり

惠 柴の戸をかれなで來鳴ほど。ぎす。世を卯の花に住やわびぬる

又

飲惠

時鳥世を卯のはなに住やわびぬ。柴の戸ぼそのあけくれになく

惠

草ふかみ路ふみまごふおかをだに。しるしかひなき夏の山陰

○莫動著動著三十棒といふ古語を書て。そのわきに

惠

見ると聞とさもあらばあれ春ふかみ。谷のうぐひす花の月かけ

○或人正覺尊の開眼をねがひければ。そのうらにかきつけ給へり

惠

御佛の光りをふらしなにしおふ。この日の本の八千代萬代

○御家の兄舎兄の

さざれいしのこけむすためし君もこの。長尾の瀧のおとづれにきけ

飲惠

○人の墨跡を請しに恒河の梵文を書て遣しける

打弄り。そのわきがきに

飲惠葛

法の水ありしながれのつきせねば。むかしを今に見るよしもがな

これは楞嚴會上に世尊波斯匿王のために恒河をさして見性の常住をしめし

給ふ心をよみ侍り

○又戒波羅蜜の梵文

彌多びす。そのわきがきに

飲惠葛

見てもしれ朝な夕なにいろそひて。千代もかはらぬ花のおもかけ



是は戒體の身口意十支倍增して盡未來際につきぬころをよみ侍る

○又波羅提木叉の梵文

𑖀𑖔𑖧𑖪𑖫𑖬𑖭𑖮𑖯𑖰𑖱𑖲𑖳𑖴𑖵𑖶𑖷𑖸𑖹𑖺𑖻𑖼𑖽𑖾𑖿

惠 海の月山のさくらをそのまゝに。なれにし君がすがたをぞ見る

是は戒體の有情非情に徧じて十方世界をそのまゝに我無表色となすのころをよみ給へり

○また或年洛西高雄山に安居し給ふ比

禪坐迎朝日 經行送夕陽 微身荷大法 迢迢守繩床 このわきにかきつけ給

へり

惠 わすれてもいろにな出そ時やときながくもちぎる峰の紅葉々

○風あらし日諸神に法施を奉るとて

神垣やいのるしるしのはごもまた草木のべふす秋の山風

○京都岡崎に住める利芳といふ老尼の方より拈花微笑の公案をふみて。大和

上の初春の御壽を祝ひ奉るとて

御手にもちし花の香さそふ春風に。あまねくなびく法のわか草

大和上より御返し

惠 見せばやなありしむかしのをやじめが。子供ちよらかす花のいろ香を

惠 みよしのゝよしのゝ山の山ざくら。花こそ花のあるじなりけり

飲惠 娑婆に居て娑婆のやうなき身にしあれど。娑婆ながら見よ娑婆にぞ有ける

惠 一切衆生へだてぬまゝにきくこと。いらぬが法のおとづれぞかし

○浄土宗の僧 大和上の御名を世にもしらせ。後の世までも残し置玉へとい

ひおこせたりければ

飲惠 此世には名をもとめじ彼國に。人まつひとのあるとやはきく

又

惠 彼國の池のはちすのうへならで。浮世の中の名こそおしけれ

○壽



惠 本来の生れぬまゝのこゝろにてちとせのもみち萬代の花

○萬

惠 萬寶のあるじを誰と人とはゞたることをしる身にこそ有けれ

○徳山禪師の書に賛し給へと願ひければ

惠 うちつけに誰にか見せん山ざくら嵐にちらぬ花もあるものを

○諸宗の趣をよみ給へり

草惠 にしひがしひだりみぎりの道とみち此秋津洲の外ならばほか

○天神の名號を願ひければそのわきに

惠 家のみちたがひしなくばひとすじにまもるぞ神のこゝろ成けり

○文殊の名號に

惠 海も山もさもあらばあれひとあゆみたゞ慕直の法の道芝

○大工なる人法語をねがひけるに護法の心をよみ給ふ

惠 家の道むかしを今にかえし引すみかねとのみ法をたのみに

○郡山の家申富松華玉子石印を彫み奉りけるに

惠 ことにふれてふみもたがへじ武士のげに世をまもる道の一すじ

惠 何事も人なみならぬえにしあらばたゞひとすじのたのもしきかな

○鶏の繪に賛をねがひければ

惠 世をすくふ御法もそれよ木綿づけの鳥だにおのが時をしるものを

○忍の字のこゝろをよみ給へる

惠 花にそひ月にともなふ人こゝろ心の外の御法ならねば

此御歌忍の字の心いづれにか侍るぞやとふ人ありその御答に花と月とは

人の賞翫する所なり人の心を寄る所なり花にそひ月にともなふ心をもて諸

人萬事にまじはるべしたとひ心に叶ぬこと有もみな我こゝろの姿なりと

○人の法語を請しけるにかきて遣し給ふ

惠 日も暮はみちたごゝし法の道遠くはないぞいそげ旅人

惠 我法は門田の稲葉としありて穂なみたちそふ秋の初風



惠

○下に鉢をゑがきて。その賛に

ひたすらにふすばらし見よ白鉢の。孔雀のゝごの色と成迄

是は佛説に薰鉢如孔雀咽色云ふ文あり

○安居の日數の牌に書つけ給へり

惠

たまさかに逢にし道しみちなれば。隙行駒にをくれじと思ふ

重出

我法は門田のいな葉とありて。穗なみたちそふ秋の初風

惠

寂靜はあられふきまくまごの外になれしふするの床の小むしろ

○よしの繪に賛を願ひけるに

惠雙

よしあしのことを難波の浦づたひ。去年のきのふの宵の秋かせ

○對月綴衣の繪に賛し給ふ

飲惠葛

つゞりさして世のさいはひの種となす。あほひと草のあらむかざりは

○長尾山の紅葉の折しも

惠

白妙の浪も木の間に秋ふけて。もみちにまがふ淡路島山

○長尾の岡雙龍庵に御閉關し給ふに。弟子なる御方かなしむことを聞しめし

て御示しのおくに

惠

冬枯はたのみありけり。おく霜のしたにつのぐむはるのいろ香を

惠

法の水きよくも清きながれなれば。世々のちぎりのにごらじとおもふ

○またあるとし人の請によりて都に久しく住給へば。河内なる人々生駒山へ

歸らせ給へよとねがひければ。尊書のおくに

飲惠

なげくなよ法の道芝ゆき歸り。わかれぞ逢ふのはじめなりけり

又

惠

おもひ出て都の春のにしきにも。かへぬ生駒の峰のしら雲

惠

ながめやりおもひ出ては。くりかへし。げにもわすれぬ瀧のしら糸

○

草惠

羊頭をかけて。狗肉を有漏路より。無漏じにかよふ釋迦もこれく

○文殊ぼさつの名號にかき侍る



惠 たづねても見まくほしさのこゝろげに。おのが心にあらぬ心を

○人の法語を請しけるに

惠 おもひ出で遠くやはかにたづぬらん。心のうちの法のみちしば

○文殊菩薩の御名號のわきに

惠 我も人もたのみありけりおしなべて。こゝろの外の御法ならねば

○不學愚昧なれば名を求る分もなく。炎王の帳にははやく名をけし候や本意に侍ると

惠 嬉しさは人なみならぬことくゝに。わきて悲願のある身ぞとおもふ

○人々法語を請しければよみて遣し侍る

草惠 見るいろの來所なければ去所もなし。不生不滅のわれならずして

惠 佛とは餘所にはあらじふしおがむ。たな心のうちの玉としらすや

草惠 本よりも一物なくばとるにつきじ。山にかねあり海に玉あり  
とし月のうつるにつけてもろ人のしぬることなき世こそたのしき

草惠 野邊に生るくさにはすがたありのまゝ。風こそ法のうてなゝりけり

草惠 草も木もおのがすがたのありふりて。ものいふことこのいらぬ世の中

惠 我法は深山のおくのさくら花。見えぬ色かを世の春にして

惠 見る人の心ながらもはるはげに。柳のみどり花のくれなる

○普賢ぼさつ名號の賛に

法の月此日の本にてりそひて。ながき關路のあらなくもがな

○人のもとより來ける文を封じをくさて

飲惠葛 木がらしのふきしくまゝにかきあつめ。名のみありその森の言の葉

○人の子のなき跡に朝がほのさきけるを見て

惠 誰もみな袖ぬらせとや朝がほの花に先だつ今朝のしら露

○草庵のほとりにすておきしなでしこの花を佛に奉るとて

惠 すておきしぬしはしらねどもろともに。佛の種としむるなでしこ

○御たらちめの忌辰といふによみて奉り給ふ



惠

歸り來て見まくほしてふことにつけて。さらぬわかれの後のくやしき

○和歌の書を人の寫して捧げけるをおさめおくこと

草惠

言の葉も千はやふるてふあし原や。ふみもたがはぬ法のひとみち

○一見阿字五逆消滅といふ文を書て。其贊に

草惠

我法はむかしも今もいろかへぬ。雪の白妙花のくれなる

○人の法語をねがひければ

飲惠

さとりとはいかなる事をいふやらん。こちがしらねばそちも知るまい

惠

だまれたゞ法も非法もうちすてゝ。もの云ことこのいらぬ世界に

惠

これにならへ生そめしより死ぬるまで。ものいふことこのいらぬばかりも

このわろのうなづくまでは居り見よ。未生已前の眉目はいかにと

これは達磨の繪の贊によみ給へり

惠

禪定はおち葉の山のやまおろし。あられふきまくまごの小夜中

飲惠葛

禪定は修するこゝろの外ならじ。園にくむ水野邊につむ花

○金輪佛頂尊の開眼を願ひければ。その贊に

惠

いつまでも世は末ならじ朝なく。出る日影のかげ見てもしれ

○赤字の開眼を願ひければ。その贊に

惠

大君のめぐみある世のよにもげに。正しき法のみちのひとすじうちの人々

○天神の御名號の贊に

惠

ねがはくはあら人神のしろしめせ。御法をまもる心づくしを

○安永三年初夏京都にて袈裟會の結制あり。諸尼集りければ。師なる御方よ

りかく詠じ送り給ふ

惠

法の友ひとしき道をふみも見て。おのが心にまかせずもがな

○又阿難尊者の名號をねがひければ。其贊に

惠

うごきなき世々の御法の橋柱。たえてし路を跡わたしてぞふる

○又摩訶波舍波提の名號を書給ふて。その贊に

惠

世を海のあまの小舟の今もなを。きよくぞ渡る跡をしたふて



飲惠

○おなじく安居の牌にかきつけ給ふ

結ぶてふ法の日數のほどをへて。ながくみだれぬ糸すじもがな

惠

○人の法語を願ひければ。十善是菩薩道場と云文をかきて。そのかたはらに  
たづねてはもとの都のかひぞある。人の人たる道のみちしは

惠

○或人蓮の畫に贊を請しければ

池の水に、こらぬ花の色をまして。げにも世にすむかひぞありける

○或人正覺尊の開眼を願ひければ。其贊に

惠

たのみある身にぞありける月の國の。光りをそふる日本の世々

○又一切衆生悉是吾子といふ經文を書し給ふて

重出

我も人もたのみありけりおしなべて。心の外の御法ならねば

○唯だひて(四)と云梵文を書し給ふて。そのわき書に

惠

まもれたゞより所なき海の面に。浮むふくろのもれぬおしへを

○人の準提尊の御名號のわきに

惠

露の身を法の蓮におきそめて。ちかひの海のかざりともがな

○魚をやしなふ畫に贊を願ひければ

惠

さかふなよ池の汀のなみ／＼も。こゝろの水のすむにまかせて

○有馬湯山に余田了溪居士といふあり。手づからうつせし戒經のおく書願

ひて。老の身の願ひかなへよ露のまも。しらぬ命のおもひ出にせむとありけ

るに。善見論に戒は是佛法の壽命。戒住すれば佛法世に住すといふ文をおほ

し。又居士護法の願心もなきにあらねば。その返しによみ給へり

惠

朝な／＼おきそふ露を見てもしれ。法の命のたへぬちぎりを

○淨土宗の人法語をねがひければ。一念彌陀佛即滅無量罪といふ文を書し給

ふて

重出

わが法はむかしも今もいろかへぬ。雪の白妙花のくれなる

○四分律戒本のおくに書し給ふ

飲惠葛

せめて世にひとりふたりの人もがな。たえ／＼残る法の玉の緒



惠

○又善見論云。戒是佛法の壽命といふ文を

繰かへしながくもがなと祈りいひのる。三世の佛のゝりの玉緒

○普賢行願贊のおくに書付給ふ

惠

法の道常にさやけき月もあるに。聞とや人のめをふたぎ行

○高貴寺にて讀給へり

惠

かつらぎや餘所のながめの雲井かは。かすみたな引あげがたのそら

○同じく寶劍を神前に納め奉るとて。袋の書付

霜鋒凜然。是神之明切却邪魔  
永護法城

惠葛戒

かつらぎや雲ある峰に跡たれて。ながくも法のまもりとも哉

惠

わが民は世々にさかえん雨がした。めぐみにつきぬとみをまもりて

惠

もろ人の千代をかさねてあふぎ見る。名さへ高野の山のおもかけ

○十善法語を石室におさめをくといふこゝろをよみ給へり

惠皓

うごきなき三世のしるしの法の雨。もらぬ岩屋に猶いひのるなり

惠戒

○出山の釋迦を畫て贊を請せしに

月しろきみちはさながらそのまゝに。おもひいるさの山のおもかけ

○人のもどめに應じて忠義の心をよみ給へり

何事を君がためとやおもふらむ。わがわたくしをわすれはてゝは

○つゝじの古木ありければ。榎椎にけづらせ給ひて

千代經ぬる深山のつゝじ。今よりや。つきせぬ法の聲を傳へよ

○人の草花の中に畜類のかけるを畫て贊し給へとねがひけるに

有情非情同時成道ときけば。げに。うれしくもあるか法の友ごち

○或人より米石を供じ奉りければ。かくよみてたわらにかきつけ侍るとなん

ならべをくたわらの數のいつまでも。つきせすまもれ法の命を

○戒學要語のおくにかき給へり

傳へこし法の水かめ水きよく。ごさじとおもふもらさじとおもふ

○猛火の中にて金剛線をひろひあげて包をくるとてよみ給へり



皓

火もやかぬ法の糸すじくりかへし。三世の佛の誓をぞおもふ

○正覺尊の賛に

我法はのべのわか草もえいで。花さきそむるみやまぢの春

○京都或醫者 大和上尊前に座禪いたしたく。醫道に妨げあるやとたづねられければ 大和上御答に。禪定は醫道にも儒道にも神道にも妨げなし。さやうのせまき事にはあらずと仰られ。よみ給へり

木も草も薬ときかばそのまゝに。露もたがはぬ法の道芝

○或人に遣し給ふ 己の字を大字に書給ふて其下に

みやまぢや花の色香のときを得て。おのが住家を人のとふまで

○骨相の上に書給ふ

わすれなよわすれじものを朝な夕な。立もはなれぬ君がおもかけ

○京都の或御弟子様。尼衆にいんぎんになされるよし書狀に書遣し給ふわすれても風になびくなどこしなへに。我住む山の峰の白雲

○後も、ぞうの院様御崩御の時御追歌

たがためにかきこし道をしらすして。てる日のくる、けふもしらまで

○

このごろはいたづらものに成りはて。くふとねるとがしごとなりけり

○

山住や折たくしばのけむりだに。たへず立せぬ葛城の雲

○

つたへきく露ももらさぬ水瓶の。うつしをくてふ法の言の葉

○臨濟曰孤明歷々

みどりなるひとつ草とぞ春は見し。秋は色々の花にぞありける

○戒嚴公へ御遣し遊されし

うすくこくおのがまに。くさく花の(下句欠)

○



惠 雨ふるやいなやとふもかふべよりあしに至るのみのりなりけり

○主人主人公

皓 しら雲よ月よ櫻よ見るまゝに萬代盡ぬをのが春秋

○

我法はあられとばしるまごの外トになれてふすゐの床のさむしろ

草壁 とひも見よたれかそなたのあるじぞと脾胃肝膽もしらぬ我身に

○知足

拾 をごりなき心を世々の寶にてつきせぬ家のまもりとも見よ

をごりなき心を世々の守りにていくよもつきぬ寶ともせよ

○和州郡山の家中の人法語を請しられ 大和上様より知し心と有と三年座禪し

て心しれず歌にて御示し遊し遣し給ふ

草惠皓 心ともしらぬ心をいつのまにわが心とやおもひそめけん

○人の法語を請しければよみて遣し給ふ

おに神も袖かわくらん此ころは習ひし文字もわすれはてにき

○秋述懐

草欣惠 世を秋の露ときへまく思ひ出に月かあらぬかながめてぞふる

○法の御歌とて

惠皓 もとよりもすぐなる道をとやかくと思ふ心にまごはされ行

○

わすれては誰が爲に聞夢の内の夢ともわかぬ夢の世の中

○大字に己と云ふ字を書いて

重出 深山路や花の色香の時を得ておのが住家を人のとふまで

○

葛城は己が住家の折を得て雲間に染る峰の紅葉ば

○

とことばに折たく柴のけむりだにたへすたゝせぬ葛城の雲



編者曰。右大和上様御尊詠一卷は尊者御作の和歌百五十九首を收む一人の歌  
一首。重出四首之を加れば百六十四首なり誰人の集めたるものなるかを知らず。表題等に依て之を察するに。尊者門下の尼僧の手に成れる者なるべし。今朽木縣鷄足寺小林正盛師所藏の古寫本に依て之を出す

此集中の和歌百三十二首は惠日集に出づ。御詠草に出づるもの十四首。飲明集に出づるもの十九首。皓月集に出づるもの九首。雙龍尊者和歌集に出づるもの二首。葛城尊者和歌集に出づるもの九首なり。皆一々冠頭に標注す

尊詠寫

式又摩那皓月集

○可那可那可

惠葛増拾 おもふげにやみにはあらし長夜のねふりさませと残る月影

○可那可那可

拾 飲惠大葛 此比はみねの木がらし吹絶て。梢に残ることのはもなし

○可那可那可

惠 三千とせの春を傳へて色かへぬ。柳のみどり花のくれなる

○愚路行 掃に

惠 朝ゆふにちりもとどめじおのづから。清きをもとの面かげにして

○鍵茶 釜蓋に

惠 しどふにもあまりあるなり過しよの。空に先だつ法のしるしを



○雪峰 杓子に

よの人をすくひもらさぬいひかひのいふかひもある法のちかひぞ

○おん 天明四年三月即覺庵にて拜覽致候

草 飲 皆人のもとの住家とおもほえてながめ盡せぬ山のおもかげ

禪定は修する心の外ならず野邊につむ花そのにくむみづ

○よしの繪の賛

よしあしも何かなにはの浦づたひこそこのきのよのよひの秋風

○普賢行願贊御校考の奥に

性鈍のひしてそこともわかぬ身のひ字書残すえにしとぞ思ふ

○長福寺規矩の御書付の奥に

三千とせにふみもたがはぬ道しあれば幾萬代の守りともがな

○天明三年尊書のおくに

我袖は旅たつ路のつゆならで世のことはにぬれ増そよ

○おなじ年の冬尊書の奥に

世を海の風しづけくば老の波また立出る折もあらなん

○天明四年正月十日高井田寺よりの御便りに。舊冬失火後の尊詠とて

然る夜にこゝろそへしは忘られてきくもいとはぬ軒の松かせ

○同じ御文に。方丈の室をつくらせたまふとて

如妙なもば世々のやみちを照らせかし。ありし毘耶離の軒の月かけ

○同三月十五日の尊書に。當寺本尊の御開眼の御修法明日高井田寺よりつと

めさせたまふとて

へだてなき光をそれとふしおがみ。こゝを常ある靈鷲とぞ思ふ

○同四月二十四日高井田寺より

たがふなよ佛の道のへだてなくむれさそひゆく法の人々

○高井田寺方丈のいろりに

とこまはに折たく柴の夕けぶり。残る齡を身のうちにして



惠 ○付落安永三年九月八日有馬より  
有馬山いななのわたりの秋ふかみなを立かくせ軒の夕ぎり

○付落十善戒法語御成滿の比

惠大

うごきなき御代のしるしの法の雨。もらぬ岩屋に猶祈るなり

○天明六年丙午六月朔日によませたまふ

惠

四十あまり七の數をかぞへ來て。むすびし夏もなかば過ゆく

○同七月十六日によませたまふとて

惠

徒に過しけるかな四十あまり。八てふ夏の法のかすく

○君たる道といふことを

惠

十の道たがはぬ民を心にて。代々ふき傳ふ伊勢のかみかせ

○平沙落雁

絹にうつす文かどぞ見る礎づたひ。なびきてくだる雁のむらく

瀟相夜雨

惠

今もなを忍ぶに餘る袂かな。そめてし竹の雨の小夜なか

漁村夕照

見わたせば此面彼面にはすあみの影うちまじへなびく夕風

江天暮雪

夕なぎや岸うつ浪もおと絶て。みぎはにつゞく苦のしらゆき

山市晴嵐

やま霧の晴間をそこと見るがうちに。數そひいそぐ市の人々

遠寺晚鐘

今日もはや入日を告る鐘のおとの。そら吹風にさそはれて來る

遠浦歸帆

白雲か波かあらぬか吹風の。たよりぞしるし真帆のかすく

洞庭秋月

惠

海の面そらもひとつにきり晴て。ふけ行まゝの秋の夜のつき



右西湖八景

○主人公といふことを

大 白雲よ月よ櫻よ見るまゝに。よろづ代つきぬおのが春あき

○心自不知心といふことを

草惠大 こゝろともしらぬ心をいつの間に。我心とや思ひそめけん

○雙龍庵にて 長尾の瀧といふ處なり

草惠大 かくまでは思ひよらずも山住の庭の月影軒のしら雲

○おなじ比

春の日のいど、長尾の瀧つ瀬に。こゑうちそへて山鳥のなく

○又いつのとしにや同じ處にてよませたまふ

柴の戸をさしていつとはわかねども。たゞくくひなの折をこそまて

○面壁達磨賛

雙 このわろがこちらむくまですはり見よ。かつて藏さぬ己が面目

○付落天明三年癸卯九月長福寺庫裏棟札のうらに

こゝぞげにありしながらの御法にて。永も國のまもりともがな

○おなじ比 山のうらに

羊躑躅木の山に寄之尼僧坊也 阿彌陀佛

拾 千代經ぬる岩間のつゝじいまさらにつきせぬ法の聲を傳よ

○西窓の残月をよませたまひける

重出 おもふげに闇にはあらし長夜のねぶりさませと残る月影

○葛城にて

飲惠葛 春秋になれてもなれぬ詠かな。たにの戸ほその曙方のそら

○述懐

惠 恨むべきわが心かなはかなくも。よにありかほにけふもくらしつ

○新死

惠 ことの葉は松の千歳のそれながら。昨日に變る今日のおもかげ



○散骨

石か木かあらぬか露のおきそひつ。夕ぐれふかきあだし野のあき

○達磨贊

九年待しもあやな小夜ふけて。真じろにうづむ谷のしらゆき

○蜺子贊

わが法は汀の萩のおとづれて。袂すゞしき秋の浦風

○又君たる道といふことを

國のかせふきもとどめすもろ共に。まもるも神のめぐみならずや

○懶瓚の贊

わが宿は人の問くるながめかは。木葉にうづむ谷のほそ道

○船子の贊

月夜よし夜よしと人に告やらで。棚なし小舟こぎかへりまつ

○龍の二幅對の贊右

雲を攀雨をひきゝて萬代に。國をぞまもるわが民のため

左

易云雲行雨施品物流形

○人の書を請しけるに昔蒼頡文字を作りし時鬼神夜な

鬼神も袂やかはく此ごろは。習ひし文もわすれはてにき

○浄土家の人我名を聞及しとて和歌を請けるに

彼國の池の蓮の上ならで。うき世の中の名こそおしけれ

○六角中將殿の息女今年四歳なるが剃髮のぬがひありけるに。先安名を付し

てそのうらに

よのために影おほへかし法の庭。生ふる二葉の春をかさねて

○北村浄貞が請し奉りけるに

法のはなよそのながめはそれながら。いや色増る大和ことのは

○天明六年十二月二十三日河州え御下向の折御船中にて時雨侍りしとて尊



書の奥に

惠 時しわかすあられまじりに時雨けり。生駒の山の雲さそひ來て

○天明七年四月四日の尊書おくに仰つかはされし尊詠 半陀迦尊者龍を降

伏したまへると豊干禪師の虎に友なふと二幅對の贊

半陀迦尊者に

惠 そらにすむたつとや人はなづくらん。なれて身にそふ千代の雨雲

豊干和尚に

惠 吹風にうそぶく聲はそれながら。枝をならさぬ御代の友ごち

中尊は佛世尊なり。これに

正覺山前夜夜月 尼連禪河春秋流 三千年後見也未 東海摩訶羅比丘

○靈照女の贊

阿爺折花去 媽々友月休 歸路何處是 明明百草頭

○六月十六日出。高井田より尊書のおくに

惠 錫杖の柄に書付させたまふとて  
露の野邊きりの山陰ゆき歸り。ともなふ法の道のひとすじ

○法滅の相かすく、あらはれしをり。法式をあらためまもるこゝろをよませ

たまふとて。同月二十七日尊書の奥に

惠 千代の竹みごりを法のたとへにて。そのふし／＼のまもりをぞ思ふ

○同じ七月高井田西之坊より六日出の尊書のおくに

惠 垢つけばとる手もたゆく洗ひほす。つゞりの衣のりたちをせよ

○大神宮を信じ奉る人の墨跡を請し奉りけるに

惠 我國のすぐなる民を心にて。吹もとゞめぬ代々の神かせ

右一首は八月八日比高井田西之坊よりの尊書の奥に書せられし也

○十一月高井田より五日出の尊書奥に

線香たてに書付させたまふとて

惠 一すじの烟を法のしるしにて。四方諸國をおほふばかりも



惠

○天明八年二月初に先月晦日京都大火にて禁裏えん焼の事申奉りし御返書の奥に奉りし文のおくにかゝせたまふとて

火宅とはおもふながらもいねがての夢おどろかす風のおどづれ

○同年六月十八日河内高井田より御返書の奥に此比人の法語を請し奉りけるによませたまふとて

解脱とはをのが姿におひ出来る。松の條々竹のおきふし

○同八月十二日の尊書に先月五十夏御満足の折の尊詠とて

戒

年月は身のをこたりのすがたかよ。五十の夏もいたづらにすぐ

又

惠戒

をしへある法の月日はそれながら。老の恥そふ年の數々

○河内の國寺元村の長なる者龍の尊詠を請し奉りしに

草惠

分のぼる雲井をおのが姿にて。田ごと涼しき夕立のあめ

○一兩年以前の尊詠のよし

惠大

もとよりもすぐなる道をとやかくと。思ふ心にまごはされ行

寛政元年

○高井田よりの御便りにある人此比子が醜容を圖して歌をこひけるに

惠雙

幾千とせ吹風すゞし水清し。ともなふ山のうごきなきよに

○人の本不生のことはりを問奉りけるによませたまふ。高井田より尊書の奥に

春秋はをのが盡せぬ色ぞかし。月の白妙はなのくれなる

○七月末つかた高井田よりの尊書の奥に

此間關羽の像に贊を請しけるに

海外もおなじ道あるものゝふのまことや千代に盡ぬおもかけ

○九月二十六日の夜高井田寺より尊書の奥に



或人猿の天を指たる繪を持來りて贊を請じけるに。世友大士のいにしへをおもひ出てよめる

天つそらむかしの風のそれながら。ふきもとゞめぬ雲の通ぢ

○又或人苦人の俗名法名定かならぬに。その追善を請しけるに

見もしらぬ人もともに。おもふぞよ。きくに隔ぬ法の道しば

○おなじ冬ある人の摸象の繪に贊を請し奉りしに

手にふれてをのがもの。とや思ふらん。その法ならぬ法の面かけ

○寛政二年正月十四日高井田よりの尊書のおくに

此比竹に雀の繪をもち來りて贊を請けるに

おきふしにさはぐ雀のそれながら。我色かへぬ軒のくれ竹

○正月二十六日尊書の奥に。外より仁義禮智信のをもむきを請けるに

相見ていつくしみふかきを仁と云。行ふてよろしきを得るを義と云。動てのり

あるを禮と云。事にふれてまごはぬを智と云。相まじはりて欺ぬを信と云

おもふげに八島の外も道ありて。めぐる月日のめぐみふかさを

○三月十五日高井田よりの尊書のおくに

大阪かしまやと云はむかしの難波津梅あづかりの子孫なり。廣岡氏と云。その

古株にて硯函此木今に若ばへ有を作り。和歌を請ければ

むかし今しる人ぞしる難津潟。有し色香に咲や此花

○又江南春の畫に贊を乞ければ

目にふれて千里をそこ。見るまゝに。柳の緑花のくれなる

○七月十六日高井田より御返書のおくに

此間大阪の居士の内より母の手跡を表装して。予に一語をそへよと願ひ來りつ。それに

仲由負米之嘆在於此一軸也。識焉

誰もげにありしめぐみの百石に。その八十石をそふるかずく



○七月二十二日高井田よりの尊書の奥に

秀道比丘三界無安猶如火宅の一行を願はれ和歌をそへ度何方の歌も三界に

はあらで三世と聞へしは虚空無色界までをよめとあるに

わけのぼる雲井の外も餘所ならぬ迷をそれとしるよしもがな

○又諸苦所因は貪欲爲本の一行に

朝な夕なうさこそまされ盡しなく我身をおもふ心ならひに

○八月朔日高井田よりの御返書の奥に

義收和歌をおくられその反歌にはあらねど

なき跡と何おもふらん神路山ひかりさしそひ出る日影を

○又ある人の無名としるせし仙人の繪に賛を乞るに

年月をそれともわかす萬代もしらぬ其名を面影にして

○又非理法權天の一行に

我國はとよあし原のなかつ國げにもたがはぬ法の道しは

○九月初の比高井田より御返書のおくに

布袋空を禮拜する圖の賛に

大空は道さだむべき道ぞかし我色變ぬ萬代を経て

○同じ十二日高井田よりの御返書のおくに

白衣觀音讚

南無大悲これや心のつきしなく衆生世界のあらんかざりは

○九月二十八日和州よりの御便りに

寛政戌の秋いかなる事かきこえけん

たがひなき其道もがな誓ある三世の菩薩のむなしからずば

○霜月十六日高井田より尊書のおくに

此間或人の賛を乞けるに

善

朝夕にわがなすわざをおもひしれやすきをもとの心とはして



○鉢の贊に

我くには神の守りの國なれば萬代いのる大君のため

○臘月十九日の尊書のおくに

此間麟喻獨覺の繪の贊に

先佛はいづくにかいます峯つゞき霞八重たつあけぼのゝそら

○寛政三年四月中旬尊書のおくに

依縁起故法爾圓成依法爾故縁起不可思議なるこゝろを

いざむかし見そめし人にこととはん秋もふけゆく月のおもかけ

○六月十八日高貴寺より御返書の際に

此間或人兎の繪に贊を乞ひけるに無相思塵論のこゝろを

をのが名は雲井の月の影きよし角なしと見る人もあるよに

○又葛城山高貴寺おくの院に在て五月雨の比よめる

峰ちかく結し庵も老が身の耳には遠き山時鳥

○八祖贊

宗門の祖師の徳を讃へて  
その徳を讃へて 徳を讃へて 徳を讃へて

右龍猛菩薩

其の徳を讃へて 其の徳を讃へて 其の徳を讃へて

右龍智菩薩

父也善五明 師也傳三密 迥然脱樊籠 卓爾無倫匹  
馳使閻王宮 若固有親昵 五月之不雨 開光明定日  
秘密神通乘 千古饒良弼

右金剛智三藏

方彰 水伏鯨 衢頓象 如意弄術士 神兵現西涼



三朝墨制一進納、ス 兩部灌頂有道場、ニ 毘盧眞印護皇國、ヲ 有軌  
玉卮妙乘運洪機、ヲ 無疆

右不空三藏

十三嗣位、ヲ 得軍民情、ヲ 兄弟鬩牆、ニ 戎衣親征、ヲ 內亂既讞、ニ  
讓國滅名、ヲ 斯傳國寶、ヲ 佛頂維瑩、ヲ 緣化震旦、ヲ 及我南京、ニ  
塔基遺經、ヲ 貽之後英、ニ

右善無畏三藏

北漸之室、ヲ 南天之局、ヲ 曆應漢記、ニ 疏通秘經、ヲ 合裡當歸察治亂、ヲ  
甕中泥封隱七星、ヲ

右一行阿闍梨

死死死去無去處、ヲ 生生生來有來由、ヲ 不退薩埵約不違、ヲ  
至于今傳此清流、ヲ

右惠果和上

萬代も絶す盡せず諸人のあふぐ高野の峰の月影

右弘法大師

右八祖贊。尊者御眞蹟和泉國泉北郡八田莊村家原寺所藏。今彼の御眞蹟を拜見す  
るに。今出す所の龍猛菩薩の贊及び金剛智三藏の贊は文に脱落あるに似たり。前  
に詩集の中に言へるが如し

かゝげては今幾千代のひかりそふ高野のおくの法のごもし火

右明算阿闍梨

○慈谿居士圖予醜容求一語

滿山林樹容宴坐、ヲ 到處石頭好打眠、ヲ 露堂堂後五百歲、ヲ 摩訶羅比丘現前

○縁覺贊

ふみ分し道ならなくも峰つゞきおほさきるさに通ふしら雲

○知足

たちさらすまもる心の朝な夕な我七福の神います宿



○應于有人之需ニ贊ニ靈符神ニ

知者之樂 仁者之壽 一星高臨 天長地久 雙龍叟

○鶴洲の蘭の繪の御贊易に友に交はることな  
云。同は心其臭如蘭

蘭は道の友ぞち打むれておなじこゝろの匂ひども見よ 百不知童子

○同人菊の繪に

筆の跡うつす色香の千代を経て露おきそふる白菊のはな

○十二月十三日高井田より尊書のおくに

此間諸方え贊を書遣し大かたわすれ申候。その内富士の繪に春の  
神代よりふりつむ雪のそれながらかすみにつゞく田子の浦なみ

夏

なつぞらの詠をそれと見るがうちにめぐるふもとの夕立の雲

秋。詩を書遣申候 秋の御歌次にあり。十二月二十四日の尊書に御しるし

冬

里もげにそれともわかす降雪のまじろに埋むあけぼのゝ空

○兎の波のうへに走る繪に贊して

霧はれて空もひとつの海づらに波やことゝふ秋の夜の月

○大黒神の贊

居り處くろきをもこの姿にて。世の福まもる八千歳の神

○同十二月二十四日高井田より尊書のおくに

先日富士の贊秋をかき候故

萬代を幾諸人のながめかよ。ふじの高根の秋の夕ぐれ

○寛政四年閏二月高井田より尊書のおくに

此間達磨大師の贊

立歸るかたしのくつの跡もげにありしながらの小夜のしら雪

○三月十三日高井田より御返書のおくに



廣岡氏の請に赴きて大般若讀經滿せる日。松に旭の繪に贊をもとめけるに。よみて書つけゝる

見てもしれ出る日にそふ千代の松。常盤堅盤の家のまもりと

○竹に三日月の繪に

三日月は園をの竹に影とめて。ひとよくの光りますらし

○朝日の瀧に經中の日出照高山。馮中無髮影と云心を

てらす日は峰より谷のおくふかく。光りにみがく瀧のしら玉

○寒山背面。捨得擲下帚而眠圖に

法非法總掃 擲帚徐打眠 白雲無來去 明月長中天

○いつの比にや

みるやいかにうきもつらきもうれしきも。此たとへなるあだし世の中

梅がゝをそれとやしるき朝なく。己が友よぶ鳩のこゑぐ

南無大悲ありし誓のいまも猶。かぎりしられぬ法の海づら

すゞしさはありしながらの琴の音を。そよ吹をくる野べの夕風

○五月はじめの比。大阪にて拜覽せし尊詠

何事もなきを浮生の主にて。ながくもあそぶ萬代の春

○忍

惠大

花にそひ月にごもなふ人心。こゝろのほかの御法ならねば

○達磨贊

これやこのさとらぬさきの悟こそ。まだまよひ見ぬ迷ひなりけれ

○秋のころ高井田より尊書のおくに

此間此元にて神職武田伊勢守と言者夫婦の贊を乞候に。伊勢守像に

桃實既題有聖神 藤源亦是稱羨羨 下二句忘却

其妻の像の贊に

神風は唯そのまゝに有馬山。ふきもとどめぬ千代をかさねて

○十一月朔日高井田より尊書のおくに



惠

この比高貴寺おくの院にてもみちを  
遠近はそこもわかす目にふれて見るに随ふ峰の紅葉々

○寛政五年正月三日大阪より尊書のおくに

寶船の畫に贊を請けるに

濁りなき心の海の寶船。こゝと吹來る風にまかせて

○達磨の贊

此わろは唯此わろが姿にて。かつて藏さぬ本の面目

○鐘馗の像の贊に此畫は畫師こゝろざしをこめ候て。若此畫外へ出候時は凶事あると傳るよし

のこしおく家の守りの千代八千代。誠を神の姿とはして

○二月中比御上京の折此ころの尊詠とて

忠

小夜ふくる夢もまよはじ朝なく。出る日影に身をまかせては

孝

花も見ん月も詠めん百年を。たゞ父母のこゝろとはして

人となる道第三編を草し已て

神代よりたがはぬ道しふみとめて。なを幾千代の守りともがな

○九月日うけたまはる

五條あたりの者くすやに雨の繪に贊を請しけるに

夏のひの長きを忍ぶ柴のいほ。まごにことゝふ夕立のあめ

○十月二日御おく齒のぬけたるを義憶願てたまはりたるに

おちのこりてすくなかりける齒の又落たるによめる

一葉にも秋をしるてふ桐が枝に。さてのこさじとさそふ山風

○金剛線のつゝみ紙のおもてに

天明三年癸卯十二月八日卯刻吉祥殿焼失。猛火中得其全線。うらに

惠大

火もやかぬ法のいとすじくりかへし。みよの佛の誓をぞおもふ



○十二月十六日尊書のおくに

達磨の贊に

妻木こる行來の路もわづらはしたゞふり埋め峰のしら雪

○十牛の圖の贊に

尋てやそれともしらぬあらを田をあらすきかへす牛のちからの

○寛政六年十二月十六日尊書のおくに

高貴寺に在て雪の風にふきまくを見て

そま人のゆき來ふ道も跡絶て。風に木つたふ峰のしら雪

○題しらす

日の本は互らぬまゝの御法にて。ひかりさしそふ萬代の春

○猿ここの月をとる繪に

手を垂ておのが寶とおもふらん。見るにかひある水の月影

寛政七乙卯正月より

○二十八日尊書の奥に

此間さる所より上宮太子の馬に乗りたまひて富士に登ります繪に贊を請し  
ゝに

大空のかぎりしられぬしるべとて。雲に友なふ甲斐の黒駒

○山中の趣を

山住は時しわかなく谷川のつらゝに結ぶ春のいとゆふ

寛政八丙辰四月より

○四月十一日河内より尊書のおくに  
さる方より雨中の梅の繪に贊を乞候に



惠

春雨のふりつゝ夜半のいろどかをよそにもらすな梅の花笠

○夏のころ御あふぎに

おろかさは世のうきこともわすられておもはん年の數つもりけり

○緑毛龜を書たるあふぎに

萬代はこゝにぞしるしうつしおく。緑龜の名にしあふてふ

○八月五日高井田より尊書に

人の東方朔浦島が子三浦大輔鶴龜を書たる繪に贊を乞候に

惠

とことばに榮久しき家を見よ。世の壽の數をあつめて

寛政九年丁巳正月より

○正月二十四日河内より尊書のおくに

此間燕の繪の贊を人の請しに

うつしおきて千代を友なふ菜たねより園の朝日になれし面影

○五月二日尊書のおくに

此間伊勢二見浦の繪に贊を請しけるに

伊勢の海汀にきよき珠くしげ。二見の浦のあけがたの空

○六月末つがた尊書の奥に

此間加島や久右衛門上京飛鳥井家にて鞆鞠の庭にて二本松のかゝり御ゆるしをうけ。その圖に贊をねがひ候に

庭の面にうつし植ては千代を千代みどりを添る二本のまつ

○或所文殊大士師子にのりたまふ贊に

のり得ては行こふまゝの山の阿に。嘯くどらも跡かくすてふ

○閏七月十八日河州より尊書のおくに

此の間唯識論八識に歌をそへ可申存じより

第六識 意識三性常現起のこゝろを

よしあしの夢かうつゝかつかの間も立ぬ難波の波風ぞなき



雙

第七識 第八識の見分を縁じて我なり法なりとし常恒に有覆無記なるを  
常世なみしき波よする伊勢海底の見るめの人しれずてふ

○中秋二十一日の尊書に

孔<sub>レ</sub>正<sub>レ</sub>識

異熟なり一切種なりとことにはに。羸劣無記のその姿にて

○十月なか比大阪にて達磨の賛に

まよひてふさとりてふことむつかしき。世はかくてこそあるべかりけれ

寛政十年

○

飲惠拾

世にありていま幾とせか老の身のはぢをもしらぬ面影ぞこれ

○疊峰和上位山一位の御しほりに

戊午の秋

慈雲叟

雙

をろかさは身をかこつべき方ぞなき。法の日數の六十なるまで

○戊午七月十六日受衣の趣をよみ侍る

ありし世の商那が袈裟の跡とめて。ながく御法のいのちともがな 慈雲叟

施主

故恭禮門院心蓮院源宣子君。紵布十三條木蘭色中量割截馬齒縫

素光院藤原元子君裁

羯磨 六十夏

飲光

持 二十夏

法護

答法 四夏

慧燈

衆 三夏

忍端

二夏

龍乘

隨喜諸衆々多

○おなじ比人の請によりて



天照大神手に寶鏡を持ち祝之曰。吾兒視此寶鏡吾を視ることく。ともに床を同じ殿を共にし以て齊鏡とすべし

仰げたまありし昔のそれながら。ますみの鏡いまにくもらず

○戊午の夏竟佛歡喜日照山和尚五十滿夏を賀し奉てよめる 飲光和南

積りこし五十のなつの法の日は。ながく普く世をやてらさん

○極月十七日大阪より尊書のおくに

先月郡山甲斐守殿へ神道古今の趣を傳へ參らせその傳授書の内兩三牒を遣し返事

神道奥秘古今傳文庫之通合落手。忝仕合。猶拜謝不盡筆端候。欽言

つたへてぞ猶もかしこし天照す。神の御すえのさかへゆく世を

かしこまり受候也

保光

此返歌に

百傳ふ名にしあふてふ常世波。しき波よする伊勢の神風

慈雲叟

いにしへも今も往こふ敷島や。道し道ある御代の人々

と返事

寛政十一年正月より

○正月二十六日かつらぎ山より御返書のおくに

百姓の貢ものを。はこぶ繪に讚を請しけるに

ありし世の弓彌たすへのそれながら。はこぶ貢の引もちぎらで

○印陀羅之所書祖像贊印陀羅通じては因陀羅と書く。宋元の間の人

乙未十二月京師之信濃請讚

愛河流既涸 慢山峰巒崩 一望千萬里 大地平如掌

寛政十二年春

○



入舟の鹽の八百重の八しほぢの神の守りの八百萬代に

○おなじ比

春雨に野邊の若草もえ出てその姿あるややぶるや

○寒山拾得讚

峰の月谿の流のそれながら相ともにしる千代の面影

○鍵屋新之助佛足圖に讚を請によめる

御佛のふみのこしおく跡ぞとは道ある家に傳てもしれ

○壘峰慧命豊干禪師虎に友なふ繪に讚を請に

わすれてはそれかあらぬか往か來か人住里の秋の夕風

○全骨相讚

一印會大日 我々も亦 師資同結誦 三密於是現

○庚申のはる京に在てよめる

みねの雲そこともわかすながめ出てこゝろにうかぶ葛城の山

雙

雙

雙

雙

寛政十三年

○三月朔日和州郡山よりの尊書に

當所の人々墨跡をもとめし中にひな一對の繪に讚を請けるに

たづねては雲井はるけく萬代にかざりをしらぬ天の浮橋

右寛政十三年三月朔日の尊書京都長福寺にあり御消息集に之を出す

○卷物のうらに

此一紙淨智居士家に傳りしを残りしを置きては兒孫の惑ともならんのことろつ

きて予によせけるに

行人はかくもや足のあなうらに茨たつてふ谷の細道

辛酉七月三日

慈雲叟

○おなじ比山邊敬品居士青蓮華をたてまつりける御返事に

蓮葉のにごりに染ぬめぐみぞとみるにかひある花のひと本

惠



○七月二十四日難波よりの尊書

君臣のみち正しき事はわが日の本のみにして萬國たぐひなきゆへ。十善正法の地として彌ろく菩薩の御下生まで正法久住と存する事に候。隨從の尼衆までも此おもむきにて護法のこゝろざしたがはぬ様專要なるべし  
よもつ海八島の外に國はあれど。わが日本のあきらけきくに  
と仰ぎたてまつる事に候

○おなじ夏筆を結なをされけるに。毛をあしき毛にかへたりければ

(歌闕く)

○おなじ郡山よりの尊書に八月十五夜三笠山の月をよませたまふとて  
阿部仲丸がむかし唐土の明州の津にて諸官とさし示せしをおもひ出て  
もろこしの人もさしてし春日なる。三笠の山に出る月影

右八月郡山よりの尊書京都長福寺にあり。御消息集に之を出す

○おなじ十月朔日の尊書に

此間大黒天の牛に乗り給ふ繪に贊を請けるに  
ちからある牛の歩のゆきかへり。我宿にます七福の神

享和二年

○正月たけのゑの御讚

ふる雪にのべふす枝の数々も。千代色變ぬ窓のなよ竹 百不知童子

○おなじ三月初。江州安養寺御灌頂の比膳所にて 純稱百拜

荒磯のかわける物をうるほすは。八十あまりの老のしらなみ  
御返し

雙

○三月九日雨寶童子の御讚

さゞ浪は誰がはる秋のながめぞと。さし打よする便りにも看よ  
跡たれて幾代よろづ代うごきなき。仰ぐめぐみのたかちほのみね

○壬戌初冬

雙



深からぬ冬もあはれをしられけり。老の寒さを人の問まで

編者曰。右尊詠寫一卷は尊者の御弟子京都長福寺皓月宗顯式又の集むる所に  
して尊者御作の和歌一百六十八首を收む。長福寺所藏の皓月尼直筆の本二種。  
并に朽木縣鷄足寺小林正盛師所藏の寫本一種を以て校合して之を出す  
此中郡山甲斐守保光公の歌の詞書きに「神道奥秘古今傳文庫之通合落手。忝仕  
合。猶拜謝不盡筆端候。欽言」といへる廿七字と。卷末に載する壬戌初冬の歌一首  
とは小林正盛師所藏の寫本に依て補ひ。餘は皆皓月尼直筆の原本のまゝなり。  
皓月尼直筆の本二種の中。一本は幾千とせ吹風すゞしの御歌まで六十六首を  
收む。尊者の御直筆にて添削し給へる所數箇所ありて。表紙に皓月尼の直筆に  
て尊前御覽相濟と記す。此本は天明八年十二月十三日尊者の御手元へ送りて尊覽  
て尊前御覽相濟と記す。を経たる者なること御消息集に出す所の同年極月二十三  
日尊者より蓮心院慧琳尼井に皓月式又に答ふる書に依て明かなり。隨一本は百六十  
て此本には天明八年八月頃までの御歌を收め。其より以後の御歌なし。一本は百六十  
六首を收む。他人の歌二首。重出一首あり。之を  
加ふれば百六十九首なり。皓月尼直筆のまゝにて尊者の御加筆

等なし。又小林正盛師所藏の寫本は明治十五年東京の大内青巒居士人をして  
高貴寺所藏の本に依りて寫さしめたるものにて。其の奥書に「明治十五年四月  
上浣松林寅太をして之を寫さしむ。原本は河内平石村高貴寺僧坊の什寶なり。  
青巒識」とあれども。其の所謂高貴寺什寶の原本今見えす。想ふに此本は皓月尼  
の集めたる百六十六首の本に就て。尊者更に御校閲を加へ處々御添削し給へ  
る者ならん歟。今其本を得ざるは深く遺憾とする所なり

此集百六十六首の中。御詠草に出づるもの一首。飲明居士の集めたる慈雲大和  
上御歌に出づるもの三首。惠日尼の集めたる雙龍大和上御歌に出づるもの四  
十七首あり。今皆一々冠頭に標注す

又此集中の歌は安永三年尊者五十七歳の時より享保二年尊者八十五歳まで  
の御作と見ゆ



雙龍尊者和歌集

編み人しらす

○人の阿彌陀佛の歌を乞奉るに詠給と

西へ行光さやけき夜もすがら我古里と頼む月影

○春秋山水の賛に

海の面山の姿の盡しなきながめをうつす夜半の月影

○三歸の下に

千代の春八千代の秋を姿にて己が心のみのりとはしれ

○

朝な／＼見るにもあかぬながめかな依他起自性のありし面影

○富士日出の賛

うつしては我國ぞかしから國の餘所にも傳ふ富士の日影と

○

なれ／＼てそこともわかす餘所にのみ見し葛城の峰のしら雲

○和州松尾一守長者大黒賛

君のめぐみ天のめぐみと仰ぎ來て幾萬代のいさおしの神

○西道寺中興和尚之賛

傳へては千代にもごらじよし水の流盡せぬ法の面影

○鍵屋新之助佛足跡圖に讚を願けるに

御佛のふみ残したる跡ぞとは道ある家に傳へてもしれ

○疊峰慧命豊干禪師虎に友なふ畫に賛を請しけるに

わすれてはそれかあらぬか往か來か人住里の秋の夕かせ

○全骨相之賛

一印會大日 我々も亦我 師資同結誦 三密於是現

奥州白川領田村郡青石村和右衛門息歳五十忠八



○印陀羅之所書印陀羅通じては因陀羅と書く宋元間人

己未十二月京師之信濃請讚

愛河流既涸 慢山峰巒崩 一望千萬里 大地平如掌

○寒山拾得之贊

嶺の月谿の流のそれながら。相ともにしる千代の面顔

○麥と蠶豆と穂をまじへ咲たる畫の贊

夏の日のながき友とやうねつゞき。そよふく風のおどづれて行

○高貴寺に在て

かつらぎはをのが時雨の折をえて。雲間にそむる峰の紅葉々

○岩に蘭の墨畫の贊

蘭は道の友ごち打むれて。おなじこゝろの匂ひとも見よ

○三猿の贊

もの事に思ひしりてよ世にありて。見ざるきかざるいはざるのさる

增 皓

阿彌陀寺藏

○松に朝日のあがる畫の贊濱口所持之

見てもしれ出る日影の朝ごとに。けふもくもらぬそのこゝろとや

○

つきせじな小島の海士も馬方も。きのふもけふもあすもゆきかふ

○

いか斗よきわざしてか天照や。ひるめの神をしばしとやめむ

○出雲大社の蛇の畫贊 周峰筆。岩田所持

わすられし八鳥の海の底つ波。げにみちしある御代のためしを

○惠美須持竿與鯛之贊

世の中はかくもあれかし天津船。風のまに／＼ふきながし來て

○二幅對互龍之贊

右降龍

雲を攀雨をひき來てよろづ代に。國をぞ守るわが民のため

皓



左昇龍

易云。雲行雨施。品物流形

○主人公

惠 しら雲と月と櫻と見るまゝに。萬代盡ぬおのが春秋

○

草大 問も見よたれかそなたの主ぞと。脾胃肝膽もしらぬわが身に

○福壽

拾 をごりなき心を代々の守にて。盡せぬ家の寶とも見よ

○達磨の贊

皓 このわろがこちらむくまで坐り看よ。かつてかくさぬおのが面目

○

我法はその色かへぬ姿にて。山の海つら月のむらさめ

○

千早振神の作業のそれながら。我ふみならしならず足音

○あしかひと云ふことを

天地はたゞそのまゝの姿にて。うつらぬとしのかぎりしられず

○達磨の贊

増 坐禪するきやつめがむねになにぞある。へんてつもなきあばら骨かな

○

佛なり道しみちある日本の。世々を盡せぬあまつ神籬 慈雲敬贊

右は雨寶童子の贊

○

草惠大 草も木もおのが姿のありふりて。ものいふことこのいらぬ世の中

○於右京阿彌陀寺一夏九旬禁足の心を讀みて 飲光五カ三十五歳

門の戸をさしてぞまもる法の道。ふみたがへじと思ふこゝろに

○



惠大

よしあしの事を難波の浦づたひこそこのきのふの宵の秋風

○川邊小萩の繪の贊

うつしおく流もたへず萬代に共□□ふ萩の一もと

○川邊に美婦の涼居る繪の贊

見てもしれむかしよりいま後もげに。あるかなきかの世の姿とは

○膳所のかたわらなる純稱と云淨家の僧師の安養寺へゆき給ふ道にて。細々

の法の意得を書き。その奥に此一首を記して呈し奉る

荒磯のかわける物をうるほすは。八十ちあまりの老のしらなみ

大和上より御かへしに

皓

さゞ浪は誰がはる秋のながめぞと。さし打寄る便りにも看よ

○月と云

異熟なり一切種なりとことばに。善惡無記の所重とはしれ

○雨寶童子の贊

皓

跡たれて幾代萬代うごきなき。仰ぐめぐみの高千穂のみね

○在雙龍

枯残る長尾の岡の薄原霜にしらけて冬ぞさむけき

○鶴猿龜三幅對の贊 狙仙筆

とし月は幾代をまたむ窓外に。をりゐる田鶴をわが友として  
神やしるいやましまさる惠こそ。ゆふしてかけて祈るしるしと  
水に浮び陸に行てふ龜もその。齡をしるやわが宿の春

○山家雪積る景に人住る畫に題

消やらぬ詠なりけりちよもげに。しのぶに餘る窓のしら雪

○蘭林齊山水の贊

見るまゝにそこともわかぬなれ〜て。幾千代の海萬代のやま

○題乗牛大黒

のせきたる家の寶のなか〜に。牛の力にたふるおも荷を



○戊午の秋

皓 をろかさは身をかこつべき方ぞなき。法の日數の六十なるまで

○庚申のはる京に在てよめる

皓 峰の雲そこともわかすながめ出て。こゝろに浮ぶ葛城の山

慈雲叟

○耳識

皓 常世波しき波よする伊勢の海底の見るめの人しれすてふ

○耳識 四煩惱常俱

皓

よしあしの夢かうつゝかつかの間もたゝぬ難波の浪風ぞなき

○第六識 意識常現起

見渡せばかざりしられぬ海つらに。扱浪風ぞたゝぬ間もなき

○眼識

山の端のそこともわかす霞つゝ。詠にさそふ春のあけぼの

○耳識

いつの間に秋の聲とや此頃の。聞になれにし山おろしの風

○鼻識

深山路はいけばいぶきのさしもくさ。さしてそれともわかなくの香に

○舌識

みどり子はそれともわかす百石に。八十石そふる母のめぐみを

○身識

窓の外に幾百年もあかすめす一句不知

○享和元年辛酉年、押小路局心蓮院功德衣の供養ありし時、其袈裟の筥のふたに書附給ふ

ありし世の商那が袈裟の跡とめて。ながくも法の命ともがな

○葛城のふもと高貴寺奥之院大師闍伽井の扉に書付給ふ

むすぶ手の流も盡じ千代を経て。ありしながらの山の井の水

○



夏の日のながき友とや峰つゞき木の間の風のそよさそひきて

○弘法大師贊

山ふかみちちくらからし諸人の仰ぐ高野の山のおもかげ

○秘密部の奥に

わが法は雲井のほかに名のみ聞都率の宮の知る人ぞしる

○

傳ては露も漏さぬ水瓶にうつして世々にのこしゝものを

○

海原や天の瓊矛の萬代をまもるしるしのいかるがの峰

○

うごきなき國のまもりの□□□□遠つ御祖のもののこふのかみ

右はほふぐの中にあり

○寛政十二年の夏大和上浪華の長榮寺へ歸らせ給ふ折しも田植の頃なれば

晴

五月雨に水せきいれてうゆる田の田子のしわざのたのしきやげに

○壬戌春浪花廣岡氏手づから畫したる尊影に贊を願ひ奉りけるに

うつしつゝ盡きぬ代までのかたみとやさしも見にくき老の面影

柏屋にあり

○昔蒼頡文字を作りし時鬼神夜なくといふころを讀せ給ふとなん

鬼神も袂やかわく此ころは習ひし文も忘れはてにき

○六角中將殿息女四才なるが剃髪の願ありけるに先安名を附し給ひて其う

らに書付給ふとなん

世のために影おほへかし法の庭生ふる二葉の春を重て

○北村淨貞が請し奉りけるに

法の花餘所のながめはそれながらいや色増る大和ここの葉

○明和年中京都岡崎に利芳と云ふ禪尼あり其元より世尊拈花の公案を評判

して呈上ありそれは

晴

晴



花咲けばとける御法と見せ給ふ。迦葉のゑみにいしんでんしん  
金波羅花うけえし道は雨土の。もれてぞ匂ふ法のおろかさ

大和上より御返しに

金波羅花うけいよそめのわらひ草。色と匂に迷おろかさ

こんはらけうけえぬさきの一ひねり。ひねりつぶしてなげすて、見よ

傳へては露も漏さぬ水瓶の。うつしおくてふ法のことの葉

右書籍中片紙に書附給となん

鳴うづらさくしら菊のそのまゝに。おもひ盡せぬ法のおも影 葛城山人

右西役持村十郎右衛門殿方うづらに白菊の賛

○題しらす

いつも見る法の色香のそみ出て。風にたわむる蘭の花

○寛政五年初春。人の忠孝のこゝろを示し玉へと願ければ

忠

天地のそのことほりをこゝろにて。萬代盡ぬ家のまもりぞ

孝

花を見ん月も詠ん百年を。たゞ父母のこゝろとはして

○同六年冬。ゑんこふの書に讚をねがいければ

手をたれて己が寶と思ふかよ。見るにかひある水の月影

○岩舟宮社門額のうらに

我國はとよあしわらの中つくに。ふみもたがはぬ道の道しば

○貴妃骨相圖賛

諸共に絶す盡せし春ふかみ。今日見る花を我姿にて

はかなくも今を現とたのむかな。過にしことの夢にならへて

○安永己亥夏中詠じ給ふ



いたづらに日數もふりぬ苦の庵に。夏を結べる五月雨の頃

○ 十善法語の終に

葛城はおのが時雨の折を得て。雲間にそむる峰の紅葉々

○ 奥の院にて

遠近はそれともわかず目にふれて。見るにしたがふ峰の紅葉々

○ 戊戌仲夏

百不知童子贊

花の色庭の紅葉々色たへて。梢にやざる峰の月影

○

法の道たらひですむぞ墨染のもの。ほし竿の横にかゝるな

○

阿耨多羅三藐三菩提の佛たち。吾がたつ杣に冥加あらせたまへ

編者曰。此一首は古歌なり

○

大

生死海に慈悲の釣船出にけり。こぎゆく音はジャクウンパンコク

○ 知足者常富

をどりなきこゝろを世々の守にて。盡せぬ家の寶とも見よ

雙龍叟

○

松島や島の島のみ鳥見えて。島から島につゞく松しま

○ 朝鶯

鶯の初音は親の意見より。きけば身にしむ春の朝起

○ 引衣

よろづ代も盡せじものを天地の。ひらけそめてし言の葉ぞこれ

○ 心みづから心をしらす見へん心なれば心を見ず

春霞たち入る山に枝折して。猶奥深く花を尋ん

さとりとは誰がをしへてか。昔より其名もしらぬおのが面目

○



惠諦

幾千歳ふく風すゞし水きよし友なふ山のうごきなき世に

雙龍叟

編者曰。右雙龍尊者和歌集一卷は尊者御作の和歌九十一首を收む古歌一首。他人の歌三首。あり。之を加ふれば九十五首なり。朽木縣鷄足寺小林正盛師所藏の古寫本雙龍遺稿に依りて之を出す。彼の雙龍遺稿は尊者御作の詩歌偈贊短篇法語等を集め。類を分たす順序を立てず。得るに隨て之を録す。誰人の集録せるものなるかを知らず。惠日尼の集めたる尊者の和歌集も此中に載せたり。惠日尼の集は前に既に出したれば。更に殘る所の和歌を悉皆採り集めて此の一卷を成し。私に題して雙龍尊者和歌集といふ

此集九十一首の中。御詠草に出づるもの二首。惠日集に出づるもの四首。皓月集に出づるもの十八首。慈雲大和上御歌増補に出づるもの一首なり。皆一々冠頭に標注せり

葛城尊者和歌集

大日寺隆慧集

○心

飲

こゝろとも知らぬこゝろをいつのまに。我がこゝろとは思ひそめけむ

○をりにふれて

飲

おもへたゞ悟らぬさきのさとりこそ。まだ迷ひえぬまごひなりけり

色身はむなしかりけり有なりけり。されど自性の月はくもらず

○孝

月も見む花も尋ねむ父母の。ありし教をこゝろにはして

○和州法隆寺に詣で、

飲

いかるがやどみの小川は今もなほ。汲み見て清きながれをぞしる

○雙龍庵にて



飲 静かなり人も訪ひ來ぬ山すみはまごの月かけ軒のしら雲

○高貴寺にて

飲 關伽を汲む道まで絶えてやま寺ののきの木末も雪のしろたへ

飲 ○寶曆八年の頃生駒山長尾の岡の瀧のほとりに庵をむすびて  
のりのえにし結ぶもうれし水清み流れ長尾の瀧のほとりに

飲 くりかへし見れどもあかじ山鳥の長尾の岡の瀧のしら糸

奥山にあらぬ住家もなかくによを捨てゝこそいとゞやすけれ

○蓮の露をよめる

有漏の身の草葉にかゝる露なるをやがてはちすの上と契らむ

○禪帶に書きたる

とかばとけ結ばゞむすべひとすじにかけ得し法のちぎりへだつな

○寶曆五亥の歳長榮寺の堂の棟札に

飲 しめゆひし法のちぎりや千早振神のみたまのあらむかぎりは

○同落慶供養の日法樂にとて

飲 千早振神しまことの神ならばわが説く法の道まもらなむ

○父母の肖像を畫かせて賛を乞はるゝ人のありければ

飲 面影を千代につたへて父母のありし教をおもひはなつな

○自性離言説のこゝろを

飲 此の頃は峰の木枯吹きたえて木末に残ることの葉もなし

○達磨の圖に

飲 世の人の見るやいかにと遍界にかつて隠さぬおのが面目

○秋述懐

世をあきの露と消えゆく思ひ出につきやあらぬとながめてぞふる

○佛の涅槃忌に

飲 ころり積みてなほいかにせむそのかみの煙たえにしあとのなげきを

○山住の日



飲 ころある人もとへかし峰つゞき雪ふりうづむ谷のした庵

○凡夫化益の難き事を

飲 いかにかに説きいかにをしへむ法の道ふみたがへたる世の人の爲

○をりにふれて

さらぬだに道踏みまよふ葛城の山陰はなほしげる夏草

○人より法語を乞はれければ

飲 おほみちは直きをもとの姿にてみぎりひだりのわづらひはなし

○人の墨蹟を乞はれければ恒河の梵文を書きて

飲 法の水ありし流れの盡きせねばむかしを今に見るよしもがな

○戒波羅蜜を書きたる傍に

飲 見てもしれ朝な夕なに色そひて千代も變らぬ花のおもかけ

○波羅提木叉の梵文の上に

飲 水の月みねのさくらをそのまゝになれにし君がすがたぞぞ見る

○郡山家臣富松華玉子が石印を彫るを好ませければ

ことにふれて踏みたがふなよ武士のげに世を守る道は一すぢ

○法語を乞はるゝ人に

飲 休らはゞ日も暮れぬべし法の山いそげ旅人道とほくとも

我法は門田の稻葉露そえてほなみすゞしき風にこそ見れ

○蘆の畫に

よしあしのことば難波のなにならず波間に宿る月にこそ知れ

○對月綴衣圖の上に賛して

飲 つゞりさして世のさいはひの種となす青人草のあらむかざりは

○文殊菩薩の畫の上に

飲 尋ねても見まくほしさのころかなおのが心にあらぬころを

○雙龍庵にこもりける頃弟子なるものゝ中になげかるゝ者ありと聞きて

飲 冬枯は頼みこそあれお霜のしたに春待つ野邊の若草



飲 法の水きよくすゞしきこゝろもて。うき世の塵に濁らずもがな

○雙龍庵の瀧をよめる

たちかへりいつかながめむ長尾なる。わすれぬ山の瀧の白いと

○人の法語を乞はれければ

飲 羊頭を狗肉といへば有漏路より、むろ路にかよふ釋迦も釋迦なれ

○文殊菩薩の名號の傍に

飲 我も人も頼みありけりおしなべて。こゝろの外の法はあらねば

○人の法語を乞はれければ

おろかさよ遠くもほかを尋ねけむ。心のうちにひそむさとりを

ひとの世は來るとしもなし去るもなし。不生不滅の我が身とぞしる

佛こそ餘處にはあらしふしをがむ。こゝろのうちのまことなりけり

飲 我法は深山の奥のさくらばな。みねぬ色香を身の春にせむ

さとりとはいかなること。をいふならむ。こちもしらねばそちもしるまい

飲惠大 禪定は修する心のほかならじ。そのに汲む水野邊に摘む花

○達磨の贊

飲 このわろのうなづくまではじつと見よ。未生已前の面目はそれ

○一見阿字五逆消滅

飲 我道はむかしも今も變りなし。ゆきは白妙花はくれなる

○普賢菩薩の名號の傍に

飲 法の月この日の本に照りそひて。ながき闇路の道しるべなり

○人より來つる文を封じおくとして

飲惠大 こがらしの吹きしくまゝにかきあつめ。名のみありその杜トリスの言の葉

○人の子のなき跡に朝顔の咲きけるを見て

飲 誰も皆袖ぬらせとやあさがほの花よりさきに消ぬし白露

○たらちめの忌辰といふ日に

飲 かへり來ぬ道とほしれごことにつけて。さらぬ別れの後のくやしき



飲

○草庵のほとりに誰が捨てけむ撫子の花のあるをひろひ佛に奉るとて  
捨ておきしぬしはしらねごもろともにほどけのたねや撫子の花

○軒の風鈴をよめる

しばしこのひゞき絶えしと思ふうちにまた音たつる軒の夕かせ

○金輪佛頂の開眼を乞はれければ其の圖の上に

いつまでも世は末ならじあさな／＼出づる日影を見てもこそしれ

○天神の名號の傍に

願くはあら人神もしろしませみのりを守る心づくしを

○阿難尊者名號の傍に

うごきなき世々のみのりのはし柱絶えてし跡をわたしそめけむ

○摩訶波舍波提比丘尼の名號の傍に

世をうみの海人の小舟に棹さしてきよくわたれる跡やしたひし

○十善是菩薩道場の文の傍に

飲

尋ねてはもとの道にぞ歸りけるひとの人たることを知りなば

○戒波羅蜜の梵文を書きたる傍に

飲

守れたゞよる岸もなき海の面にうかぶ袋のもれぬをしへを

○觀世音菩薩の名號の傍に

飲

露の身をのりのはちすにおきてこそちかひの海のかぎりともなれ

○四分律戒本のおはりに

飲惠大

せめて世にひとりふたりの人もがなたえ／＼のこる法の玉の緒

○葛城の山に住みける頃

飲

軒ちかく啼きふるしても老らくの耳にはうときやまほとゞぎす

○自像の上に

世にありていくばくどしか老が身のはちをもしらぬ面影ぞこれ

○高貴寺にて

飲

葛城や餘處のながめもかくはあらしくも霞になびくあけぼの



飲惠皓

春秋になれてもなれぬながめかな。たにのどぼそのあけがたの空

○佛の賛

ほとけとは誰が聞きそめてしらいとの結びもどめぬ峰のまつかせ

○葛城山岩船明神の額に

神明のみこゝろにかなひ。五十鈴河きよき流れ萬代に盡きず。天津日嗣の高き御位うごきなく。八洲の浪静にあを人くさの茂りなむあえり

増

我國は豊葦原のなかつくに。なみもたがはぬ道のみちしば

○秋の日高貴寺にて

かつらぎやおのが時雨の折を得て。雲間に染る峰のもみぢ葉

○血書の梵本普賢行願賛のおくに

そのかみにちぎりしまゝをしるべにて。法のみちしば踏みもまよはじ

増

○神道の書のおくに

つたへては八洲のほかもくもりなき。みちし三笠の山の端の月

○唯授一人の秘書の包紙に

増

誰と共にのぞみ高野のやまふかみありしながらの夜半の月影

○秘書のおくに

増

後の世も人やあるらむ入るにふかき。やまぢの奥の枝折たづねて

○岩船明神の神殿の中に

惠増

千早振神のこゝろのそのまゝを。すぐなる御代の千歳にも見むぞイ

○をりにふれて

増

名利とは魔王の釣の糸ぞかし。餌につく魚の身のはてを見よ

○出山釋迦圖に

増

月白き道はさながらそのまゝに。おもひ入るさの山の端の月

○をりにふれて

増

このごろは諸一切種もわすられて。いたづらに聞く入相のかね

○馬鳴尊者の名號の傍に



増 いくくしみありし六度はさて過ぎぬ。今ひとたびの跡たれよかし

○平岩城舊記のはじめに

平岩忍覺居士なる人より。先祖平岩城主なりし河内守吉房公が佩びられし刀  
劔を高貴寺に納められければ。其の鞘に書きたる

恵大増 葛城や雲ゐる峰にあとたれて。ながくも法のまもりともがな

○高貴寺の佛前の額に

恵増 月のいろ花の香ごとにおもひ出る。よに住みわぶる人も有てふ

恵増 我法は松ふく風のおとづれて。のきにさやけき峰の月かけ

恵増 草も木もげに御佛のこゝろとて。世々にたがはぬおのが春秋

○西窓の残月を

恵皓増拾 おもふげに闇にはあらしながき世の。ねぶりさませと残る月かけ

○尋字の開眼を乞はれければ。詠みて其人におくりぬ

飲 おほぎみのめぐみある世のよにもげに。正しき法のみちはひとすぢのイ

大正八年六月初旬

某うつす

編者曰。右葛城尊者和歌集一卷は尊者御作の和歌八十一首を收む。高貴寺所藏  
の葛城餘韻と題する寫本大正八年六月初旬書寫に依て之を出す。葛城餘韻は紀州高野口  
町大日寺的場隆慧師大正十年五月餘歳にて死亡の集めたるものにて尊者御作の漢詩十四  
首と和歌八十一首とを集む。今その漢詩を除き。和歌のみを取り出して別に一  
巻となし。題を改めて葛城尊者和歌集といふ  
八十一首の中。御詠草に出づるもの三首。飲明集に出づるもの四十六首。恵日集  
に出づるもの十六首。大和上御尊詠に出づるもの十首。皓月集に出づるもの四  
首なり。皆一々冠頭に標注す



慈雲大和上御歌増補

高貴寺戒心集

○佛の賛

佛とは誰が聞そめて白糸のむすびもどめぬ峰の秋かせ

○神明のみこゝろに叶ひ。いすゞ川清き流よろづ世に盡す。天津ひつぎの高き

御位うごきなく。八島の波しづかに。あを人くさのしげりなんあえり

葛 我がくにはとよあし原のなかつ國。なみもたがはぬみちの道しば

此は葛城山高貴寺岩舟大明神社頭の額なり

○高貴寺にて秋のこゝろをよめる

雙 かつらぎはをのが時雨の折を得て。雲間にそむる峰の紅葉々

○西窓の残月をよめる

惠晴葛拾 おもふげに闇にはあらし長夜の。睡りさませとのこる月影

○血書の梵本普賢行願賛のおくに

葛 そのかみにちぎりしまゝをしるべにて。法の道芝ふみも迷はじ

○玄宗皇帝開元錢をもつて鑄る所の楊貴妃所持の鏡を平岩忍覺居士神室に納むる時。箱のふたに書付侍る

ことほりは心の外のます鏡。いく年月のかけをうつして

○聖僧下禪床。而禮。駄都。難陀。跋難陀。二龍階。下捧。供具。

我國のたからなりけりうごきなき。世々のまもりの影をとめて

此は唐筆。羅漢禮拜供養舍利之圖の表具の裏書なり。浪花北野萬善寺の寶物

○神儒偶談のおくに翁分れんとして口ずさみして云

よしさらば歸る袂にしたひゆけ。吹とゞめ得ぬ花の下かせ

○自像の畫の賛に

さらに又なにをかいはんうつしおく。我面影に耻づるおもかけ

○達磨の畫の賛に



雙 座禪するきやつめがむねに何かある。へんてつもなきあばら骨かな

○ 尊の又の又

尋ねてはもとのすみかのかひぞある。人の人たる道の道しは

○ 曼茶羅の箱のふたのうらに

惠拾 御佛は盡せぬ法をそのまゝに。いたらぬどころなきすがたとして

○ 神書のおくに

傳へては八島の外もくもりなき。みちし三笠のやまの月影

右一首尊者御眞蹟京都長福寺所藏。神勅口傳の奥にあり

○ 齒のぬけし時によめる

このはちる秋の日かすともろともに。残りすくなき我よはい哉

○ 唯授一人の秘書の包紙に 没後焼却すべし

葛 誰と共にのぞみ高野の山ふかみ。ありしながらの夜半の月影

○ 秘書の奥に

葛 後の世も人やあるらん入るにふかき。やまぢの奥の枝折たづねて

○ 岩舟宮の神殿の内に

惠葛 千早振る神のこゝろのそのまゝを。すぐなる御代の千歳にも見ん

○ 名利てふことを

葛 名利とは魔王のつりの糸ぞかし。餌につく魚の身の果を看よ

○ 出山釋迦の賛

惠大 月しろき道はさながらそのまゝに。思ひ入さの山の面影

○ 題しらす

葛 此のごろは諸一切種もわすられて。いたづらにきく入相のかね

○ 金泥書普門品の奥に書きつけ侍る

露ばかりうつす御法のかひぞある。福聚の海のかぎりなければ

○ 論主馬鳴尊者と書きし脇に

葛 いくくしみありし六度はさて過ぎぬ。今一度の跡垂よかし



雙

諸共に絶えず盡せし春ふかみ。けふ見る花をわが姿にて

○骨鎖相全體圖の賛に

わするなよわすれじものを朝な夕な。立もはなれぬ君が面影

○平岩城舊記てふ書の初に

とゞめおく有しむかしの跡ぞげに。千代も盡せぬ家の守と

○高井田より葛城の秀道慧命なる御弟子の許への書面に、山中御閑に可被成

御入羨敷存候」としるせし奥に

峰の雲そこともわかすながめ出て。おもひにうかぶ葛城の山

○天明八年戊申七月十六日。五十夏を満せるによめる

皓拾

とし月は身のをこたりの姿かよ。五十の夏もいたづらにすぐ

○二

惠皓

教ある法の月日はそれながら。老の耻そふとしのかすく

○平岩忍覺居士なる人より先祖平岩城主河内守吉房公の佩び玉ひし刀劔を

高貴寺に納めければ。其のさやに

惠大葛

かつらぎや雲ある峰に跡たれて。ながくも法のまもりともがな

○高貴寺にある佛前の額に

惠葛

月の色花の香ごとにおもひ出づる。世に住みわぶる人もあるてふ

惠葛

わが法は松ふく風のおとづれて。軒にさやけきみねの月影

惠葛

草も木もげに御佛のこゝろとて。世々にたがはぬおのが春秋

○弘法大師御休息蹟に

しばしとてこゝにやすらふ法の師の跡馨しき道の邊の石

編者曰。右慈雲尊者御歌増補一卷は尊者御作の和歌三十三首を收む。高貴寺戒  
心和上飲明集の不足を補はんが爲に集めたる者なり。今高貴寺所藏の戒心和  
上直筆の本并に明治二十七年出版の活字本慈雲飲光尊者詩歌集に依て之を



出す

此中惠日集に出づるもの九首。大和上様御尊詠に出づるもの一首。皓月集に出づるもの二首。雙龍尊者和歌集に出づるもの三首。葛城尊者和歌集に出づるもの十二首。皆一々冠頭に標注す

### 慈雲尊者和歌拾遺

○予が庵の西に圓窓をひらく。これになん三つの徳ありけらし。一つに圓明。これは諸法性起の義なり。二つに日想。三つに水想。この二つは觀經の趣きをうつす。此徳は名くべきことにはあらず。さして求めしにはあらねど。おのづから五つの景あれば、これをとりて五景窓と名けぬ。その三徳をよめる

圓明

花をまち月を友なふ春秋のながめぞまごのすがたなりける

日想

ちぎりありてともにわけいる山の端に。けふも□□たつ夕日影かな

水想

瑠璃の池の光りや四方にかよふらし。こゝもかぎりをしらぬ海づら

○同じく五景をよめる



惹瀑聲

山陰やたきのしら糸みだれては。のきに玉ちる風のころく  
霞わたる梢につたふ風につけて。いろかをそふる瀧つ瀬の音

吞西海

海原や八重の鹽風おのづから。まごのかざしの淡路島山  
秋津洲のほかゝあらぬかいづる日の。いるともわかぬまごの海づら

擁暮雲

谷ふかみ風さへ餘所に音たへて。ともにあはれをそふる夕雲  
夕ぐれは雲まくのきの時しわかぬ。花こそ三世の手向ならまし

臨殘月

鐘の音もきこへぬ窓のあけがたに。身のおこたりを告る月かけ

惠皓高増

おもふげに闇にはあらしながき夜の。ねむりさませと残る月影

帶落霞

かぎりしらの浪間をそれは蘇迷盧の。みごりにうかぶ夕霞かな  
あけぬより心あれとや夕ぐれは。わきてかすみの戸ざす我庵

慈雲叟

右十三首は高井田長榮寺所藏の古寫本尊者御法語の終に附記せり

○天正年の頃前關白近衛前久公牧岡社に詣したまふ。高内正定みちの御しる  
べにて此寺に入せたまふて

惠大

枯のころ長尾のおかのすゝき原。霜もしらけていとさむけき

雙龍菴識

右は長尾不動寺趾の石碑に刻せるものにて。尊者の御眞筆なり。此歌は既に惠日  
集及び大和上様御尊詠に出たれども。前書き同からず。故に重て之を出す

○天正の頃前關白前久公牧岡社に詣す。高内正定路の御しるべに参り此瀧に  
よぢ玉ふて

惠大

たづねずばありとも爰に山鳥の。長尾のおくの瀧のしら糸

雙龍菴識

右は長尾の瀧の岩面に刻せるものにて。尊者の御眞筆なり。此歌も既に惠日集及  
び大和上様御尊詠に出たれども。前書き同からず。故に重て之を出す

慈雲尊者和歌拾遺

三百二十七



○臨濟錄の奥に書付け給へる歌

千代を経てかくしかねてもいとどなを。見る人のなきゝみが面影

○其

春秋はことば盡せぬいろぞかし。月の白妙花のくれなる

○大阪の根來東悦といふ人盲龜といふ者を高貴寺に寄進す。尊者その箱の裏に

根來氏名爲盲龜。爾來衆人信其言。或云此是俗稱。蛸枕海中石。間多附其底下。一口是其口也。與之飯粒。則須臾噉盡云

おさめをく燕の石のためしとや。めしひのかめと人の傳て

雙龍叟

○紺紙金泥普門品の奥に

普門品一卷所如。納子書以寄予也。納子號普門。斯經目同焉。其志曰。報酬四恩。曰普爲一切衆生。曰回向無上菩提。斯經云。八萬四千衆生皆發無等々阿耨多羅三藐三菩提心。斯願以適。豈謂之無其緣由乎哉。謂之無其契當乎哉

安永三年甲子夏

雙龍飲光敬識

草

露ばかりうつすしづくもかひぞある。福聚の海のかぎりなければ

○尊者御所持大五股杵の箱の蓋の裏に

此法はありしながらのすがたにて。つきせぬ國のまもりともがな

○寛政三年庚戌三月尊者紺紙金泥兩部種子曼茶羅を書し。同月二十日夜開眼

し給ふ。四門界道等は京師の住人原在中の畫く所なり。發願檀主は平岩忍覺

居士なり。此の曼茶羅の箱の蓋の裏に

金泥兩部種子小比丘飲光稽首和南寫之

惠戒

御佛は盡せぬ法をそのまゝに。いたらぬ處なきすがたとして

右六首尊者御眞蹟高貴寺所藏

○十八道事鈔上卷の奥に

天明改元辛丑十二月二十一日加朱。竟此中稱師者上貞下紀大和上也

わすれても餘處にもらすな葛城や。高間の山の峰につたへて

慈雲尊者和歌拾遺

三百二十九



右一首尊者御眞蹟攝州田邊法樂寺所藏

○尼戒本を刪定し竟りてよみ侍る

いむことの五百のかずくたもちいて此身を三世の御法とも看よ 慈雲叟

右高井田長榮寺所藏の四分刪定比丘尼戒本の卷末に記す。明堂和上の寫なり

○達磨畫贊

さとりてふ迷てふこと六かしき世はかくてこそあるべかりけれ 葛城山人

○十善是菩薩道場と書き給ひて其次に

たづね來てもとの住家のかひぞある人のひとたるみちの道しは

右二首尊者御眞蹟高井田長榮寺所藏

○千衣裁製簿第一百六十三衣遠山の處に記し給へる歌

つたへては遠山鳥のおろのおのながくも法の鏡ともなれ

右尊者御眞蹟高貴寺所藏

○摩多體文を書して其奥に

月の國の御法を添て日本の世々に絶せぬ光ともがな

貞子

○水薬師寺闕伽井の板額に

都ちかき鹽小路の里なる鹽通山水薬師寺の再びむかしに立かへりなん時至けるによみて其鎮守の神前にさゝげ奉る 慈雲叟

鹽かよふ名にしあふてふわく水のみちて道あるためしにぞ汲ちかひある法のながれの水薬師濁らぬ御代のまもりともがな

板の裏に

京師西七條鹽小路鹽通山水薬師寺境内有澧泉古云從若州小濱海中直通徹至此地涌出故地稱鹽小路山號鹽通寺名水薬師。瑠璃尊應世之靈刹矣。傳云平相國在日没得此靈水免脫病惱劇苦云云。十二大願之感應可仰可信也。其涌泉澄淨清冷甘美而全無鹹味實可謂八功德水也。今見泉底有小鱗爲浮沈游泳眞可驗與海水通徹嗚呼法界融會不可思議不可思量哉。往年天明中吾本師書表面國歌今茲天保十一庚子夏日恐文字磨滅使沙彌智猛謹刻之



右三首尊者御眞蹟京都水藥師寺所藏

○安永亥のどしの冬十善法語草本のおくにかきつけゝる

誰がためにわけこし道のしるべぞよ。てる日の暮る今日をしらすて

○經中に安居竟衆僧滿夏のをりを遇佛歡喜日僧自恣日と云り。この天明癸卯

のとし。長福寺に初て諸尼衆上中下座和合し二十箇あまり夏の法式如法に

つとまりぬれば。安居竟の日隨喜のこゝろをのぶる

すゑの世とおもふべきかはなつをみて。今日にあふてふ法の人々

迦綈那に準じて上座尼衆へ衣財を賞勞するに。そのなか一衣ふるきをまじへ

けるに

きる絹はあたらしきをど世にはいへど。いとふなふるき麻のころもゝ

中座已下の衆へ手巾をおくりて

これもその法の具の數としれ。身とこゝろとの垢をきよめて

慈雲叟

○天の御蔭といふ神書の奥に記し給へる歌

天てらすひかりはいづこわかねども。わきて曇らぬ日のもとぞこれ

○尊者御生家の庭前に躑躅の大木あり。其の木にて鍵椎を作らしめ長福寺に

寄せらる。その底部に尊者御自筆にて書附け給へる御歌

羊躑躅木之<sup>ニ</sup>寄<sup>ス</sup>之<sup>ニ</sup>尼僧坊也

羊<sup>ノ</sup>躑<sup>ノ</sup>躅<sup>ノ</sup>木<sup>ニ</sup>寄<sup>ス</sup>之<sup>ニ</sup>尼<sup>ノ</sup>僧<sup>ノ</sup>坊<sup>也</sup>

皓

千代經ぬる岩間のつゝじいまさら。に。つきせぬ法の聲を傳よ

○十善是菩薩道場と書き給ひて。その脇に

みてもしれふもとの櫻峰の月。とりも直さぬ己が面目

雙龍叟

右七首尊者御眞蹟京都長福寺所藏

○蛭兒戎神の賛時在高井田長榮寺

世の中はかくもあれかし天津ふね。風のまに／＼ふきつたへきて

○出雲大社龍蛇の賛

わすられし大海原の底津浪。げに道しある御代のためしを







せども言葉書きあれば重て之を出す

○戊午秋功德衣を衆僧のうけし時よめる

ありし世の商那が袈裟の跡どめてながくも法の命ともがな

時六十夏滿。行年八十一

右尊者御眞蹟江州栗田郡安養寺にあり。袈裟の箱の蓋に書附給へり。此歌晴月集及び雙龍尊者和歌集にも載せられたれども詞書同からず。故に重て此に出す

○肖像自贊書優婆塞弟子義照筆

行年八十七。坐夏六十五 慈雲叟

寫しては法の姿のつきしなき。後五百歳もかくもあるべく

右尊者御眞蹟高井田長榮寺所藏

○人の墨跡をもとめしに梵文をかきつかはしければ。それに又贊を請けるに  
よめる歌三首

𑖀𑖄𑖅𑖆𑖇

飲惠大葛 法の水ありしながれのつきせねば。むかしを今に見るよしもがな

𑖀𑖄𑖅𑖆𑖇𑖈

飲惠大葛 見てもしれ朝な夕なに色そひて。千代も變らぬ花のおもかけ

𑖀𑖄𑖅𑖆𑖇𑖈

惠大 海の月山の櫻をそのまゝに。なれこしきみが姿とぞ見る

初の歌は楞嚴會上にて世尊波斯匿王のために恒河をさして見性の常住なることを示したまふこゝろをよめる也

次の歌は戒體の身口意十支に増上して盡未來際つきせぬこゝろをよめるなり。後のうたは戒體の有情非情に徧滿して十方世界この無表色となるこゝろをよめるなり

𑖀𑖄𑖅𑖆𑖇𑖈𑖉𑖊𑖋𑖌𑖍𑖎𑖏𑖐𑖑𑖒𑖓𑖔𑖕𑖖𑖗𑖘𑖙𑖚𑖛𑖜𑖝𑖞𑖟𑖠𑖡𑖢𑖣𑖤𑖥𑖦𑖧𑖨𑖩𑖪𑖫𑖬𑖭𑖮𑖯𑖰𑖱𑖲𑖳𑖴𑖵𑖶𑖷𑖸𑖹𑖺𑖻𑖼𑖽𑖾𑗀𑖿𑗁𑗂𑗃𑗄𑗅𑗆𑗇𑗈𑗉𑗊𑗋𑗌𑗍𑗎𑗏𑗐𑗑𑗒𑗓𑗔𑗕𑗖𑗗𑗘𑗙𑗚𑗛𑗜𑗝𑗞𑗟𑗠𑗡𑗢𑗣𑗤𑗥𑗦𑗧𑗨𑗩𑗪𑗫𑗬𑗭𑗮𑗯𑗰𑗱𑗲𑗳𑗴𑗵𑗶𑗷𑗸𑗹𑗺𑗻𑗼𑗽𑗾𑗿𑘀𑘁𑘂𑘃𑘄𑘅𑘆𑘇𑘈𑘉𑘊𑘋𑘌𑘍𑘎𑘏𑘐𑘑𑘒𑘓𑘔𑘕𑘖𑘗𑘘𑘙𑘚𑘛𑘜𑘝𑘞𑘟𑘠𑘡𑘢𑘣𑘤𑘥𑘦𑘧𑘨𑘩𑘪𑘫𑘬𑘭𑘮𑘯𑘰𑘱𑘲𑘳𑘴𑘵𑘶𑘷𑘸𑘹𑘺𑘻𑘼𑘽𑘾𑘿𑙀𑙁𑙂𑙃𑙄𑙅𑙆𑙇𑙈𑙉𑙊𑙋𑙌𑙍𑙎𑙏𑙐𑙑𑙒𑙓𑙔𑙕𑙖𑙗𑙘𑙙𑙚𑙛𑙜𑙝𑙞𑙟𑙠𑙡𑙢𑙣𑙤𑙥𑙦𑙧𑙨𑙩𑙪𑙫𑙬𑙭𑙮𑙯𑙰𑙱𑙲𑙳𑙴𑙵𑙶𑙷𑙸𑙹𑙺𑙻𑙼𑙽𑙾𑙿𑚀𑚁𑚂𑚃𑚄𑚅𑚆𑚇𑚈𑚉𑚊𑚋𑚌𑚍𑚎𑚏𑚐𑚑𑚒𑚓𑚔𑚕𑚖𑚗𑚘𑚙𑚚𑚛𑚜𑚝𑚞𑚟𑚠𑚡𑚢𑚣𑚤𑚥𑚦𑚧𑚨𑚩𑚪𑚫𑚬𑚭𑚮𑚯𑚰𑚱𑚲𑚳𑚴𑚵𑚷𑚶𑚸𑚹𑚺𑚻𑚼𑚽𑚾𑚿𑜀𑜁𑜂𑜃𑜄𑜅𑜆𑜇𑜈𑜉𑜊𑜋𑜌𑜍𑜎𑜏𑜐𑜑𑜒𑜓𑜔𑜕𑜖𑜗𑜘𑜙𑜚𑜛𑜜𑜝𑜞𑜟𑜠𑜡𑜢𑜣𑜤𑜥𑜦𑜧𑜨𑜩𑜪𑜫𑜬𑜭𑜮𑜯𑜰𑜱𑜲𑜳𑜴𑜵𑜶𑜷𑜸𑜹𑜺𑜻𑜼𑜽𑜾𑜿𑝀𑝁𑝂𑝃𑝄𑝅𑝆𑝇𑝈𑝉𑝊𑝋𑝌𑝍𑝎𑝏𑝐𑝑𑝒𑝓𑝔𑝕𑝖𑝗𑝘𑝙𑝚𑝛𑝜𑝝𑝞𑝟𑝠𑝡𑝢𑝣𑝤𑝥𑝦𑝧𑝨𑝩𑝪𑝫𑝬𑝭𑝮𑝯𑝰𑝱𑝲𑝳𑝴𑝵𑝶𑝷𑝸𑝹𑝺𑝻𑝼𑝽𑝾𑝿𑞀𑞁𑞂𑞃𑞄𑞅𑞆𑞇𑞈𑞉𑞊𑞋𑞌𑞍𑞎𑞏𑞐𑞑𑞒𑞓𑞔𑞕𑞖𑞗𑞘𑞙𑞚𑞛𑞜𑞝𑞞𑞟𑞠𑞡𑞢𑞣𑞤𑞥𑞦𑞧𑞨𑞩𑞪𑞫𑞬𑞭𑞮𑞯𑞰𑞱𑞲𑞳𑞴𑞵𑞶𑞷𑞸𑞹𑞺𑞻𑞼𑞽𑞾𑞿𑟀𑟁𑟂𑟃𑟄𑟅𑟆𑟇𑟈𑟉𑟊𑟋𑟌𑟍𑟎𑟏𑟐𑟑𑟒𑟓𑟔𑟕𑟖𑟗𑟘𑟙𑟚𑟛𑟜𑟝𑟞𑟟𑟠𑟡𑟢𑟣𑟤𑟥𑟦𑟧𑟨𑟩𑟪𑟫𑟬𑟭𑟮𑟯𑟰𑟱𑟲𑟳𑟴𑟵𑟶𑟷𑟸𑟹𑟺𑟻𑟼𑟽𑟾𑟿𑠀𑠁𑠂𑠃𑠄𑠅𑠆𑠇𑠈𑠉𑠊𑠋𑠌𑠍𑠎𑠏𑠐𑠑𑠒𑠓𑠔𑠕𑠖𑠗𑠘𑠙𑠚𑠛𑠜𑠝𑠞𑠟𑠠𑠡𑠢𑠣𑠤𑠥𑠦𑠧𑠨𑠩𑠪𑠫𑠬𑠭𑠮𑠯𑠰𑠱𑠲𑠳𑠴𑠵𑠶𑠷𑠸𑠺𑠹𑠻𑠼𑠽𑠾𑠿𑡀𑡁𑡂𑡃𑡄𑡅𑡆𑡇𑡈𑡉𑡊𑡋𑡌𑡍𑡎𑡏𑡐𑡑𑡒𑡓𑡔𑡕𑡖𑡗𑡘𑡙𑡚𑡛𑡜𑡝𑡞𑡟𑡠𑡡𑡢𑡣𑡤𑡥𑡦𑡧𑡨𑡩𑡪𑡫𑡬𑡭𑡮𑡯𑡰𑡱𑡲𑡳𑡴𑡵𑡶𑡷𑡸𑡹𑡺𑡻𑡼𑡽𑡾𑡿𑢀𑢁𑢂𑢃𑢄𑢅𑢆𑢇𑢈𑢉𑢊𑢋𑢌𑢍𑢎𑢏𑢐𑢑𑢒𑢓𑢔𑢕𑢖𑢗𑢘𑢙𑢚𑢛𑢜𑢝𑢞𑢟𑢠𑢡𑢢𑢣𑢤𑢥𑢦𑢧𑢨𑢩𑢪𑢫𑢬𑢭𑢮𑢯𑢰𑢱𑢲𑢳𑢴𑢵𑢶𑢷𑢸𑢹𑢺𑢻𑢼𑢽𑢾𑢿𑣀𑣁𑣂𑣃𑣄𑣅𑣆𑣇𑣈𑣉𑣊𑣋𑣌𑣍𑣎𑣏𑣐𑣑𑣒𑣓𑣔𑣕𑣖𑣗𑣘𑣙𑣚𑣛𑣜𑣝𑣞𑣟𑣠𑣡𑣢𑣣𑣤𑣥𑣦𑣧𑣨𑣩𑣪𑣫𑣬𑣭𑣮𑣯𑣰𑣱𑣲𑣳𑣴𑣵𑣶𑣷𑣸𑣹𑣺𑣻𑣼𑣽𑣾𑣿𑤀𑤁𑤂𑤃𑤄𑤅𑤆𑤇𑤈𑤉𑤊𑤋𑤌𑤍𑤎𑤏𑤐𑤑𑤒𑤓𑤔𑤕𑤖𑤗𑤘𑤙𑤚𑤛𑤜𑤝𑤞𑤟𑤠𑤡𑤢𑤣𑤤𑤥𑤦𑤧𑤨𑤩𑤪𑤫𑤬𑤭𑤮𑤯𑤰𑤱𑤲𑤳𑤴𑤵𑤶𑤷𑤸𑤹𑤺𑤻𑤼𑤽𑤾𑤿𑥀𑥁𑥂𑥃𑥄𑥅𑥆𑥇𑥈𑥉𑥊𑥋𑥌𑥍𑥎𑥏𑥐𑥑𑥒𑥓𑥔𑥕𑥖𑥗𑥘𑥙𑥚𑥛𑥜𑥝𑥞𑥟𑥠𑥡𑥢𑥣𑥤𑥥𑥦𑥧𑥨𑥩𑥪𑥫𑥬𑥭𑥮𑥯𑥰𑥱𑥲𑥳𑥴𑥵𑥶𑥷𑥸𑥹𑥺𑥻𑥼𑥽𑥾𑥿𑦀𑦁𑦂𑦃𑦄𑦅𑦆𑦇𑦈𑦉𑦊𑦋𑦌𑦍𑦎𑦏𑦐𑦑𑦒𑦓𑦔𑦕𑦖𑦗𑦘𑦙𑦚𑦛𑦜𑦝𑦞𑦟𑦠𑦡𑦢𑦣𑦤𑦥𑦦𑦧𑦨𑦩𑦪𑦫𑦬𑦭𑦮𑦯𑦰𑦱𑦲𑦳𑦴𑦵𑦶𑦷𑦸𑦹𑦺𑦻𑦼𑦽𑦾𑦿𑧀𑧁𑧂𑧃𑧄𑧅𑧆𑧇𑧈𑧉𑧊𑧋𑧌𑧍𑧎𑧏𑧐𑧑𑧒𑧓𑧔𑧕𑧖𑧗𑧘𑧙𑧚𑧛𑧜𑧝𑧞𑧟𑧠𑧡𑧢𑧣𑧤𑧥𑧦𑧧𑧨𑧩𑧪𑧫𑧬𑧭𑧮𑧯𑧰𑧱𑧲𑧳𑧴𑧵𑧶𑧷𑧸𑧹𑧺𑧻𑧼𑧽𑧾𑧿𑨀𑨁𑨂𑨃𑨄𑨅𑨆𑨇𑨈𑨉𑨊𑨋𑨌𑨍𑨎𑨏𑨐𑨑𑨒𑨓𑨔𑨕𑨖𑨗𑨘𑨙𑨚𑨛𑨜𑨝𑨞𑨟𑨠𑨡𑨢𑨣𑨤𑨥𑨦𑨧𑨨𑨩𑨪𑨫𑨬𑨭𑨮𑨯𑨰𑨱𑨲𑨳𑨴𑨵𑨶𑨷𑨸𑨹𑨺𑨻𑨼𑨽𑨾𑨿𑩀𑩁𑩂𑩃𑩄𑩅𑩆𑩇𑩈𑩉𑩊𑩋𑩌𑩍𑩎𑩏𑩐𑩑𑩒𑩓𑩔𑩕𑩖𑩗𑩘𑩙𑩚𑩛𑩜𑩝𑩞𑩟𑩠𑩡𑩢𑩣𑩤𑩥𑩦𑩧𑩨𑩩𑩪𑩫𑩬𑩭𑩮𑩯𑩰𑩱𑩲𑩳𑩴𑩵𑩶𑩷𑩸𑩹𑩺𑩻𑩼𑩽𑩾𑩿𑪀𑪁𑪂𑪃𑪄𑪅𑪆𑪇𑪈𑪉𑪊𑪋𑪌𑪍𑪎𑪏𑪐𑪑𑪒𑪓𑪔𑪕𑪖𑪗𑪘𑪙𑪚𑪛𑪜𑪝𑪞𑪟𑪠𑪡𑪢𑪣𑪤𑪥𑪦𑪧𑪨𑪩𑪪𑪫𑪬𑪭𑪮𑪯𑪰𑪱𑪲𑪳𑪴𑪵𑪶𑪷𑪸𑪹𑪺𑪻𑪼𑪽𑪾𑪿𑫀𑫁𑫂𑫃𑫄𑫅𑫆𑫇𑫈𑫉𑫊𑫋𑫌𑫍𑫎𑫏𑫐𑫑𑫒𑫓𑫔𑫕𑫖𑫗𑫘𑫙𑫚𑫛𑫜𑫝𑫞𑫟𑫠𑫡𑫢𑫣𑫤𑫥𑫦𑫧𑫨𑫩𑫪𑫫𑫬𑫭𑫮𑫯𑫰𑫱𑫲𑫳𑫴𑫵𑫶𑫷𑫸𑫹𑫺𑫻𑫼𑫽𑫾𑫿𑬀𑬁𑬂𑬃𑬄𑬅𑬆𑬇𑬈𑬉𑬊𑬋𑬌𑬍𑬎𑬏𑬐𑬑𑬒𑬓𑬔𑬕𑬖𑬗𑬘𑬙𑬚𑬛𑬜𑬝𑬞𑬟𑬠𑬡𑬢𑬣𑬤𑬥𑬦𑬧𑬨𑬩𑬪𑬫𑬬𑬭𑬮𑬯𑬰𑬱𑬲𑬳𑬴𑬵𑬶𑬷𑬸𑬹𑬺𑬻𑬼𑬽𑬾𑬿𑭀𑭁𑭂𑭃𑭄𑭅𑭆𑭇𑭈𑭉𑭊𑭋𑭌𑭍𑭎𑭏𑭐𑭑𑭒𑭓𑭔𑭕𑭖𑭗𑭘𑭙𑭚𑭛𑭜𑭝𑭞𑭟𑭠𑭡𑭢𑭣𑭤𑭥𑭦𑭧𑭨𑭩𑭪𑭫𑭬𑭭𑭮𑭯𑭰𑭱𑭲𑭳𑭴𑭵𑭶𑭷𑭸𑭹𑭺𑭻𑭼𑭽𑭾𑭿𑮀𑮁𑮂𑮃𑮄𑮅𑮆𑮇𑮈𑮉𑮊𑮋𑮌𑮍𑮎𑮏𑮐𑮑𑮒𑮓𑮔𑮕𑮖𑮗𑮘𑮙𑮚𑮛𑮜𑮝𑮞𑮟𑮠𑮡𑮢𑮣𑮤𑮥𑮦𑮧𑮨𑮩𑮪𑮫𑮬𑮭𑮮𑮯𑮰𑮱𑮲𑮳𑮴𑮵𑮶𑮷𑮸𑮹𑮺𑮻𑮼𑮽𑮾𑮿𑯀𑯁𑯂𑯃𑯄𑯅𑯆𑯇𑯈𑯉𑯊𑯋𑯌𑯍𑯎𑯏𑯐𑯑𑯒𑯓𑯔𑯕𑯖𑯗𑯘𑯙𑯚𑯛𑯜𑯝𑯞𑯟𑯠𑯡𑯢𑯣𑯤𑯥𑯦𑯧𑯨𑯩𑯪𑯫𑯬𑯭𑯮𑯯𑯰𑯱𑯲𑯳𑯴𑯵𑯶𑯷𑯸𑯹𑯺𑯻𑯼𑯽𑯾𑯿𑰀𑰁𑰂𑰃𑰄𑰅𑰆𑰇𑰈𑰉𑰊𑰋𑰌𑰍𑰎𑰏𑰐𑰑𑰒𑰓𑰔𑰕𑰖𑰗𑰘𑰙𑰚𑰛𑰜𑰝𑰞𑰟𑰠𑰡𑰢𑰣𑰤𑰥𑰦𑰧𑰨𑰩𑰪𑰫𑰬𑰭𑰮𑰯𑰰𑰱𑰲𑰳𑰴𑰵𑰶𑰷𑰸𑰹𑰺𑰻𑰼𑰽𑰾𑰿𑱀𑱁𑱂𑱃𑱄𑱅𑱆𑱇𑱈𑱉𑱊𑱋𑱌𑱍𑱎𑱏𑱐𑱑𑱒𑱓𑱔𑱕𑱖𑱗𑱘𑱙𑱚𑱛𑱜𑱝𑱞𑱟𑱠𑱡𑱢𑱣𑱤𑱥𑱦𑱧𑱨𑱩𑱪𑱫𑱬𑱭𑱮𑱯𑱰𑱱𑱲𑱳𑱴𑱵𑱶𑱷𑱸𑱹𑱺𑱻𑱼𑱽𑱾𑱿𑲀𑲁𑲂𑲃𑲄𑲅𑲆𑲇𑲈𑲉𑲊𑲋𑲌𑲍𑲎𑲏𑲐𑲑𑲒𑲓𑲔𑲕𑲖𑲗𑲘𑲙𑲚𑲛𑲜𑲝𑲞𑲟𑲠𑲡𑲢𑲣𑲤𑲥𑲦𑲧𑲨𑲩𑲪𑲫𑲬𑲭𑲮𑲯𑲰𑲱𑲲𑲳𑲴𑲵𑲶𑲷𑲸𑲹𑲺𑲻𑲼𑲽𑲾𑲿𑳀𑳁𑳂𑳃𑳄𑳅𑳆𑳇𑳈𑳉𑳊𑳋𑳌𑳍𑳎𑳏𑳐𑳑𑳒𑳓𑳔𑳕𑳖𑳗𑳘𑳙𑳚𑳛𑳜𑳝𑳞𑳟𑳠𑳡𑳢𑳣𑳤𑳥𑳦𑳧𑳨𑳩𑳪𑳫𑳬𑳭𑳮𑳯𑳰𑳱𑳲𑳳𑳴𑳵𑳶𑳷𑳸𑳹𑳺𑳻𑳼𑳽𑳾𑳿𑴀𑴁𑴂𑴃𑴄𑴅𑴆𑴇𑴈𑴉𑴊𑴋𑴌𑴍𑴎𑴏𑴐𑴑𑴒𑴓𑴔𑴕𑴖𑴗𑴘𑴙𑴚𑴛𑴜𑴝𑴞𑴟𑴠𑴡𑴢𑴣𑴤𑴥𑴦𑴧𑴨𑴩𑴪𑴫𑴬𑴭𑴮𑴯𑴰𑴱𑴲𑴳𑴴𑴵𑴶𑴷𑴸𑴹𑴺𑴻𑴼𑴽𑴾𑴿𑵀𑵁𑵂𑵃𑵄𑵅𑵆𑵇𑵈𑵉𑵊𑵋𑵌𑵍𑵎𑵏𑵐𑵑𑵒𑵓𑵔𑵕𑵖𑵗𑵘𑵙𑵚𑵛𑵜𑵝𑵞𑵟𑵠𑵡𑵢𑵣𑵤𑵥𑵦𑵧𑵨𑵩𑵪𑵫𑵬𑵭𑵮𑵯𑵰𑵱𑵲𑵳𑵴𑵵𑵶𑵷𑵸𑵹𑵺𑵻𑵼𑵽𑵾𑵿𑶀𑶁𑶂𑶃𑶄𑶅𑶆𑶇𑶈𑶉𑶊𑶋𑶌𑶍𑶎𑶏𑶐𑶑𑶒𑶓𑶔𑶕𑶖𑶗𑶘𑶙𑶚𑶛𑶜𑶝𑶞𑶟𑶠𑶡𑶢𑶣𑶤𑶥𑶦𑶧𑶨𑶩𑶪𑶫𑶬𑶭𑶮𑶯𑶰𑶱𑶲𑶳𑶴𑶵𑶶𑶷𑶸𑶹𑶺𑶻𑶼𑶽𑶾𑶿𑷀𑷁𑷂𑷃𑷄𑷅𑷆𑷇𑷈𑷉𑷊𑷋𑷌𑷍𑷎𑷏𑷐𑷑𑷒𑷓𑷔𑷕𑷖𑷗𑷘𑷙𑷚𑷛𑷜𑷝𑷞𑷟𑷠𑷡𑷢𑷣𑷤𑷥𑷦𑷧𑷨𑷩𑷪𑷫𑷬𑷭𑷮𑷯𑷰𑷱𑷲𑷳𑷴𑷵𑷶𑷷𑷸𑷹𑷺𑷻𑷼𑷽𑷾𑷿𑸀𑸁𑸂𑸃𑸄𑸅𑸆𑸇𑸈𑸉𑸊𑸋𑸌𑸍𑸎𑸏𑸐𑸑𑸒𑸓𑸔𑸕𑸖𑸗𑸘𑸙𑸚𑸛𑸜𑸝𑸞𑸟𑸠𑸡𑸢𑸣𑸤𑸥𑸦𑸧𑸨𑸩𑸪𑸫𑸬𑸭𑸮𑸯𑸰𑸱𑸲𑸳𑸴𑸵𑸶𑸷𑸸𑸹𑸺𑸻𑸼𑸽𑸾𑸿𑹀𑹁𑹂𑹃𑹄𑹅𑹆𑹇𑹈𑹉𑹊𑹋𑹌𑹍𑹎𑹏𑹐𑹑𑹒𑹓𑹔𑹕𑹖𑹗𑹘𑹙𑹚𑹛𑹜𑹝𑹞𑹟𑹠𑹡𑹢𑹣𑹤𑹥𑹦𑹧𑹨𑹩𑹪𑹫𑹬𑹭𑹮𑹯𑹰𑹱𑹲𑹳𑹴𑹵𑹶𑹷𑹸𑹹𑹺𑹻𑹼𑹽𑹾𑹿𑺀𑺁𑺂𑺃𑺄𑺅𑺆𑺇𑺈𑺉𑺊𑺋𑺌𑺍𑺎𑺏𑺐𑺑𑺒𑺓𑺔𑺕𑺖𑺗𑺘𑺙𑺚𑺛𑺜𑺝𑺞𑺟𑺠𑺡𑺢𑺣𑺤𑺥𑺦𑺧𑺨𑺩𑺪𑺫𑺬𑺭𑺮𑺯𑺰𑺱𑺲𑺳𑺴𑺵𑺶𑺷𑺸𑺹𑺺𑺻𑺼𑺽𑺾𑺿𑻀𑻁𑻂𑻃𑻄𑻅𑻆𑻇𑻈𑻉𑻊𑻋𑻌𑻍𑻎𑻏𑻐𑻑𑻒𑻓𑻔𑻕𑻖𑻗𑻘𑻙𑻚𑻛𑻜𑻝𑻞𑻟𑻠𑻡𑻢𑻣𑻤𑻥𑻦𑻧𑻨𑻩𑻪𑻫𑻬𑻭𑻮𑻯𑻰𑻱𑻲𑻳𑻴𑻵𑻶𑻷𑻸𑻹𑻺𑻻𑻼𑻽𑻾𑻿𑼀𑼁𑼂𑼃𑼄𑼅𑼆𑼇𑼈𑼉𑼊𑼋𑼌𑼍𑼎𑼏𑼐𑼑𑼒𑼓𑼔𑼕𑼖𑼗𑼘𑼙𑼚𑼛𑼜𑼝𑼞𑼟𑼠𑼡𑼢𑼣𑼤𑼥𑼦𑼧𑼨𑼩𑼪𑼫𑼬𑼭𑼮𑼯𑼰𑼱𑼲𑼳𑼴𑼵𑼶𑼷𑼸𑼹𑼺𑼻𑼼𑼽𑼾𑼿𑽀𑽁𑽂𑽃𑽄𑽅𑽆𑽇𑽈𑽉𑽊𑽋𑽌𑽍𑽎𑽏𑽐𑽑𑽒𑽓𑽔𑽕𑽖𑽗𑽘𑽙𑽚𑽛𑽜𑽝𑽞𑽟𑽠𑽡𑽢𑽣𑽤𑽥𑽦𑽧𑽨𑽩𑽪𑽫𑽬𑽭𑽮𑽯𑽰𑽱𑽲𑽳𑽴𑽵𑽶𑽷𑽸𑽹𑽺𑽻𑽼𑽽𑽾𑽿𑾀𑾁𑾂𑾃𑾄𑾅𑾆𑾇𑾈𑾉𑾊𑾋𑾌𑾍𑾎𑾏𑾐𑾑𑾒𑾓𑾔𑾕𑾖𑾗𑾘𑾙𑾚𑾛𑾜𑾝𑾞𑾟𑾠𑾡𑾢𑾣𑾤𑾥𑾦𑾧𑾨𑾩𑾪𑾫𑾬𑾭𑾮𑾯𑾰𑾱𑾲𑾳𑾴𑾵𑾶𑾷𑾸𑾹𑾺𑾻𑾼𑾽𑾾𑾿𑿀𑿁𑿂𑿃𑿄𑿅𑿆𑿇𑿈𑿉𑿊𑿋𑿌𑿍𑿎𑿏𑿐𑿑𑿒𑿓𑿔𑿕𑿖𑿗𑿘𑿙𑿚𑿛𑿜𑿝𑿞𑿟𑿠𑿡𑿢𑿣𑿤𑿥𑿦𑿧𑿨𑿩𑿪𑿫𑿬𑿭𑿮𑿯𑿰𑿱𑿲𑿳𑿴𑿵𑿶𑿷𑿸𑿹𑿺𑿻𑿼𑿽𑿾𑿿𑀀𑀁𑀂𑀃𑀄𑀅𑀆𑀇𑀈𑀉𑀊𑀋𑀌𑀍𑀎𑀏𑀐𑀑𑀒𑀓𑀔𑀕𑀖𑀗𑀘𑀙𑀚𑀛𑀜𑀝𑀞𑀟𑀠𑀡𑀢𑀣𑀤𑀥𑀦𑀧𑀨𑀩𑀪𑀫𑀬𑀭𑀮𑀯𑀰𑀱𑀲𑀳𑀴𑀵𑀶𑀷𑀸𑀹𑀺𑀻𑀼𑀽𑀾𑀿𑁀𑁁𑁂𑁃𑁄𑁅𑁆𑁇𑁈𑁉𑁊𑁋𑁌𑁍𑁎𑁏𑁐𑁑𑁒𑁓𑁔𑁕𑁖𑁗𑁘𑁙𑁚𑁛𑁜𑁝𑁞𑁟𑁠𑁡𑁢𑁣𑁤𑁥𑁦𑁧𑁨𑁩𑁪𑁫𑁬𑁭𑁮𑁯𑁰𑁱𑁲𑁳𑁴𑁵𑁶𑁷𑁸𑁹𑁺𑁻𑁼𑁽𑁾𑁿𑂀𑂁𑂂𑂃𑂄𑂅𑂆𑂇𑂈𑂉𑂊𑂋𑂌𑂍𑂎𑂏𑂐𑂑𑂒𑂓𑂔𑂕𑂖𑂗𑂘𑂙𑂚𑂛𑂜𑂝𑂞𑂟𑂠𑂡𑂢𑂣𑂤𑂥𑂦𑂧𑂨𑂩𑂪𑂫𑂬𑂭𑂮𑂯𑂰𑂱𑂲𑂳𑂴



うごきなき山のすがたをうつし來て。聞も盡せぬ谷の鶯

○

我宿の霞を春のまもりにて。餘所にもらさぬ窓の梅が香

○ 高貴寺奥之院に在てよめる

峰ちかく結し庵も老が身の耳には遠き山ほとゝぎす

○

夢かとも思ひさだめぬなには瀉あしのかりねのみちか夜の春

右七首尊者御眞蹟大阪府田邊法樂寺所藏

○ 西窓の殘月を詠て

惠皓葛増

おもふげに闇にはあらしながき夜のねぶりさませどのこる月影

雙龍叟

右一首尊者御眞蹟奈良唐招提寺所藏なり。又大阪府田邊法樂寺所藏の御眞蹟は歌の後に「右西窓の殘月をよめる。慈雲叟」と書し給ふ。此歌前にも出したれども前には題なく此には題あり。故に重て之を出す

○ 雙龍に在てよめる

惠

かくまではおもひよらずも山住の庭の月影軒のしら雲

慈雲叟

右一首尊者御眞蹟新潟縣刈羽郡石地町形藏院所藏。此歌は惠日集皓月集等にも出たれども。前書き同からず。故に重て之を出す

○ 雙龍に庵をしめてよめる

かくまではおもひよらずも山住の峰のしら雲軒の月影

慈雲叟

右一首尊者御眞蹟大阪府西區春日出町清海復三郎氏所藏

○

よのなかを何にたとへん朝ぼらけ。すぎゆくふねのあとのしら波

右一首尊者御眞蹟大阪府南河内郡山田村北小路正作氏所藏

○ 知足者常富

雙

おごりなきこゝろを世々の守にて。盡せぬ家の寶とも見よ

雙龍叟

右一首尊者御眞蹟大阪府田邊法樂寺所藏

慈雲尊者和歌拾遺



○福聚海

をこりなき心を世々の寶にて。盡せぬ家のまもりども見よ

右一首尊者御眞蹟神戸市元町五丁目丹波謙藏氏所藏

○福聚

奢なきこゝろをよゝのたからにて。盡せぬ家の守りども見よ

右一首尊者御眞蹟大阪市北區眞砂町一瀬爲三郎氏所藏。此は題に海の字なし

慈雲叟

○

十善是菩薩道場

司馬君實有<sub>レ</sub>此訓云<sub>レ</sub>積金以<sub>レ</sub>遺子孫。子孫未必能守。積書以<sub>レ</sub>遺子孫。子孫未必能讀。不如積陰德於冥冥之中。以爲子孫長久之計。此先賢之極言。乃後人之龜鑑也。

雙龍叟

右一首尊者御眞蹟大阪市西區春日町清海復三郎氏所藏

○

をこりなきこゝろを代々の守にて。盡せぬ家の寶ともがな

葛城山人

右一首尊者御眞蹟大阪府中河内郡高井田村辻本巳之吉氏所藏

○

をこりなきこゝろを世々のまもりにて。盡せぬ家の寶とも見よ

百不知童子

右一首尊者御眞蹟大阪市西區春日町清海復三郎氏所藏

○風あらし日諸神に法施を奉りてよめる

草 神垣やいのるしるしのほごもげに。草木のべふす秋の山かせ

右一首尊者御眞蹟京都市清水四丁目淨土宗西光寺土川善徵師所藏の尊者御眞蹟普賢行願贊の奥にあり。此歌前の慈雲尊者御詠草の中にあれども彼には題なく。此には題あり。故に重て之を出す

○達磨大師破六師といふ書の奥に書附け給へる歌

いにしへを忍ぶにあまる袂かな。世々を盡せぬ法のめぐみに

慈雲叟

右一首京都長福寺所藏の古寫本「達磨大師破六師」の奥にあり



○打月

うつるとも月もおもはずうつすとも水もおもはぬ廣澤の池

右一首尊者御眞蹟大阪府南河内郡長野町吉年善作氏所藏

○善來親護者

内も外もむつまじく經る萬代に。つきぬちかひをそのすがたにて

右一首栃木縣鶴足寺小林正盛師編集の慈雲親護集草本第四によりて之を出す

○達磨の畫の贊

無功德をそらにつたへて天の影。日の御かげぞとたゞ仰ぎ見る

葛城山人

右一首尊者御眞蹟大阪府泉北郡高師町春日山土井宙氏所藏

○四海

ひと雫末に倚きておのづから。舟を浮せしけふの樂さ

右一首尊者御眞蹟大阪府中河内郡高井田村塚本四郎氏所藏。板額なり

○觀音の像の贊畫筆者未詳

經云自心執自心非幻爲幻法

にぎりなき心をそれと見るまゝに。みだれそめてし瀧のしら糸

慈雲叟拜

○達磨の畫の贊

朝夕のことにふれては。見ても看よ。すべる坊主のをのが面目

雙龍光敬書

○

立さらで守るこゝろの朝な夕な。わが七福の神います宿

慈雲叟

○忠

あさな〜いづる日影は我ための。こゝとをしふる西の山端

百不知童子

○極樂願求のこゝろを

朝な〜出る日影は我ために。こゝとをしふる西の山端

葛城山人

○

我法は一二三かそれならで。窓にこゝとふ峰の松風

葛城山人

○一圓相を畫きてその傍に



百年三萬六千日かさねてしるし山のよそほひ

葛城山人

○秋海棠の賛畫筆者不詳

草も木も己が姿と聞ばげにくくもあるか秋の夕風

百不知童子

○神農の像の賛

海の外も道はたがはじ我國の少彦名の神のこゝろに

雙龍雲道者

右九首尊者御眞蹟大阪市西區春日出町清海復三郎氏所藏

○三界無安猶如火宅

わけのぼる雲井の外もよそならぬ迷をそれと知る道もがな

光杜多

○  
見る物はあたらしきよしたゞ人はふりぬるのみぞよろしかるべく

右二首尊者御眞蹟大阪市北區眞砂町一瀬爲三郎氏所藏

○玉津島の社に賛して云く

立歸る波のまに／＼萬代もなにしあふてふ和歌の浦風

百不知童子

右一首尊者御眞蹟大阪市岡井榮三郎氏所藏也。短冊に書し給ふ

○又

立さらでまもるこゝろの朝な夕な我七福の神います宿

慈雲叟

右一首尊者御眞蹟大阪市一瀬爲三郎氏所藏。この歌前と同じ。但し前には題なし。

今は梵字の題あり。故に重て之を出す

○  
たちさらで守る心の朝な夕なわが七福の神まもる宿

飲光

右一首楞木縣鶴足寺小林正盛師の寫本に依る

○楊柳觀音像賛畫筆者不詳

南無大悲これや心の盡しなく衆生世界のあらん限は

慈雲敬賛

右一首尊者御眞蹟大阪市一瀬爲三郎氏所藏。この歌皓月の集には白衣觀音の讚とす。今は楊柳觀音の讚に書き給ふ。故に重て之を出す



飲惠大皓  
葛

此ごろは峰の木枯風ふき絶て。こすえにのこるここの葉もなし

慈雲叟

右一首尊者御眞蹟大阪市一瀬爲三郎氏所藏。類に書し給ふ。この歌飲明居士の集  
惠日尼の集大和上様御尊詠葛城尊者和歌集には「自性離言説といふ心を」と題し。  
皓月尼の集には「アハクア琴弓」と題す。今は題なく署名あり。故に重て之を出す

○寶珠を畫きてその傍に

摩尼寶はをのが心のすがたにて。げにうごきななき世々の人々

百不知童子

○妙

谷のすがた山のおもかげ小夜ふけて。月にともなふみよしのゝ花

雙龍叟

○經に心を師とすることなかれと

山陰や路のぬかりのほごを。したなれぬ駒にこゝろゆるすな

慈雲叟

右三首尊者御眞蹟大阪市西區下福島三丁目河野孝次郎氏所藏

○

趙州因僧問云何祖師西來。意州云庭前柏樹子 光杜多云

皓

柴の戸をさしていつとはわかねども。たゞく水鶏のをりをこそまで

右一首尊者御眞蹟大阪市河野孝次郎氏所藏。この歌皓月尼の集にもあれど題大  
に異り。故に重て之を出す

○

萬代のはるをそれとや我宿に。吹も絶せぬ伊勢の神風

慈雲叟

右一首尊者御眞蹟大阪市某氏所藏

○南無佛

まよひこし道をいづことわかかねて。はかなく昨日今日とくらしつ

右一首尊者御眞蹟神戸市三宮町一丁目辻氏所藏なり。同家出版の釋家墨迹寫眞  
帖に出づ。又大阪府泉北郡高師町春日山土井宙氏所藏なり

○雙龍にて御詠歌

朝なく出る日影は我ために。よゝとおしゆる秋の山の端

右一首準境居士の筆記せる雙龍大和上垂示卷上に出づ



○大石良雄の畫きたる釋迦尊に題し給ひて

うつしおくその物部の心もて。金剛不壞の名にしあふてふ

葛城慈雲叟

右一首栃木縣鷓足寺小林正盛師の寫本に依る

○寛政六甲寅三月の末。天龍桂州長老尊師へ御染筆を乞ひ奉り。貧人の寶を求るごとくおもひ入り侍りけるに。程なく卯月二日御遷化のよし傳へうけたまはりて残念いふ計なく。何事是に喩とせん。御生前には誠に老婆心切の垂示をかふむり。老生の面目を上なき事に思ひ侍りしに。今亦おくれ奉ること。赤子の父母を失ひたる如く。猶も高德をしたひ侍る

惜べし名殘の霜の朝ばらけ

右一首尊者御眞蹟大阪市東區今橋五丁目奥谷宇之助氏所藏

編者曰。右慈雲尊者和歌拾遺一卷は今新に編次する所なり。尊者御作の和歌九十四首を收む。此中二十二首は前來の集にも出でたれども。前書き等同からざ

編者曰。右慈雲尊者和歌拾遺一卷は今新に編次する所なり。尊者御作の和歌九十四首を收む。此中二十二首は前來の集にも出でたれども。前書き等同からざるが故に重て之を出す。之を除きて餘の七十二首は皆前來の諸集に漏れたり。今尊者の御眞蹟に依り或は古寫本に依りて之を集む。尙遺漏多かるべし。伏して後賢の補入し給はんことを望む



### 尊者御眞蹟和歌所在記

尊者御眞蹟の和歌今回親しく拜見せるもの百餘首に及べり。今其の所在を示さんが爲に此の記を作る。慈雲尊者御詠草一卷は京都西賀茂神光院所藏の御眞蹟雜記に依れる者にて、其の和歌四十九首の中二十九首は尊者の御眞蹟なれども、此は既に一卷として別に掲げたれば今は之を出さず。冠頭に草拾等と注せるは前來諸集の略標なり

編者記

草拾 つゆばかりうつすしづくもかひぞある。福聚の海のかぎりなければ

惠葛増 月の色花の香ごとに思ひ出る。世に住わぶる人も有てふ

惠葛増 我法は松吹風のおとづれて。軒にさやけき峰の月かけ

惠葛増 草も木もげに御佛の心とて。世々にたがはぬ己が春秋

惠暗増 教ある法の月日はそれながら。老の耻そふ年の數々

惠増拾 御佛は盡せぬ法をそのまゝに。いたらぬ處なき姿とて

拾 千代を経てかくしかねてもいとゞなを見る人のなききみが面影

拾 春秋はことば盡せぬいろぞかし。月の白妙花のくれなる

拾 おさめをく燕の石のためしとや。めしひのかめと人の傳て

拾 此法はありしながらのすがたにて。つきせぬ國のまもりともがな

拾 つたへては遠山鳥のおろのおの。ながくも法の鏡ともなれ

拾 年月は身のをこたりのすがたかよ。五十の夏もいたづらにすぐ

右十二首高貴寺所藏

葛増 我がくにはとよあし原のなかつ國。なみもたがはぬみちの道しは

右一首葛城山高貴寺岩舟大明神社頭の額なり

飲惠暗 春秋になれても馴ぬ詠めかな。たにのとぼその明がたのそら

右一首高貴寺所藏。又大阪天王寺村四ツ松義光庵所藏。又淡路國津名郡安乎村

蓮花寺谷内清巖師所藏。又岡山市御野法界院松阪旭宥師所藏。又大阪市清海復



三郎氏所藏。又同市鰻谷西之町加納由兵衛氏所藏

雙塔 かつらぎはそのが時雨の折をえて。雲間にそむる峰の紅葉々

右一首高貴寺所藏。又大阪市浦江了徳院所藏

葛増 名利とは魔王の釣の糸ぞかし。餌につく魚の身のはてを見よ

右一首高貴寺所藏。又大阪市清海復三郎氏所藏

惠大 願くはあら人神のしろしめせ。御法を守る心づくしを

葛増 誰と共にのぞみ高野のやまふかみ。ありしながらの夜半の月影

増 さらに又なにをかいはんうつしおく。我面影に耻づるおもかけ

拾 さとりてふ迷てふこと六かしき。世はかくてこそあるべかりけれ

拾 たづね來てもとの住家のかひぞある。人のひとたるみちの道しは

拾 寫しては法の姿のつきしなき。後五百歳もかくもあるべく

右六首河内國高井田長榮寺所藏

拾 わすれても餘所にもらすな葛城や。高間の山の峰につたへて

拾 法の水ありしながれのつきせねば。むかしを今に見るよしもがな

拾 見てもしれ朝な夕なに色そひて。千代も變らぬ花のおもかけ

拾 海の月山の櫻をそのまゝに。なれこしきみが姿とぞ見る

拾 うごきなき山のすがたをうつし來て。聞も盡せぬ谷の鶯

拾 我宿の霞を春のまもりにて。餘所にもらさぬ窓の梅が香

拾 峰ちかく結し庵も老が身の耳には。遠き山ほとゝぎす

拾 夢かとも思ひさだめぬ。なには海あしのかりねのみじか夜の春

右八首大阪府東成郡田邊法樂寺所藏

惠皓葛増拾 思ふげにやみには。あらじ長き夜のねぶりさませと残る月影

右一首田邊法樂寺所藏。又奈良唐招提寺所藏。又大阪府南河内郡山田村北小路

正作氏所藏。又大阪府東成郡天王子村柳原三井芳松氏所藏

拾 おごりなきこゝろを世々の守にて。盡せぬ家の實とも見よ

右一首田邊法樂寺所藏。又大阪清海復三郎氏所藏



草惠大 法のえにしむすぶもしるしみず清みながれ長尾の瀧のしら糸

右一首河内國中河内郡若江村岩田觀音寺所藏

草惠大 かくまでは思ひよらずも山住の庭の月かげ軒のしらくも

右一首岩田觀音寺所藏。又新潟縣刈羽郡石地村新義豊山派形藏院戸川良暢師所藏

惠皓 露の野邊霧の山かげ行かへり。ともなふ法の道のひとすじ

惠皓 そらに住たつとや人はなづくらむ。馴て身に添ふ千代の雨雲

惠皓 吹風にうそぶく聲はそれながら。枝をならさぬ御代の友ごち

皓拾 千代經ぬる岩間のつゝじいまさらに。つきせぬ法の聲を傳よ

皓拾 一葉にも秋をしるてふ桐が枝に。さてのこさじとさそふ山風

皓拾 積りこし五十のなつの法の日は。ながく普く世をやてらさん

皓拾 みねの雲そこともわかずながめ出て。こゝろにうかぶ葛城の山

皓拾 たづねては雲井はるけく萬代に。かぎりをしらぬ天の浮橋

皓拾 もろこしの人もさしてし春日なる。三笠の山に出る月影

増 傳へては八島の外もくもりなき。みちし三笠のやまの月影

拾 すすゑの世とおもふべきかはなつをみて。今日にあふてふ法の人々

拾 きる絹はあたらしきを。と世にはいへど。いとふなふるき麻のころもゝ

拾 これもその法の具の數としれ。身とこゝろとの垢をきよめて

拾 誰がためにわけこし道のしるべぞよ。てる日の暮る今日をしらすて

拾 天てらすひかりはいづこわかねども。わきて曇らぬ日のもどぞこれ

拾 みてもしれふもとの櫻峰の月。とりも直さぬ己が面目

拾 世の中はかくもあれかし天津ふね。風のまに／＼ふきつたへきて

拾 わすられし大海原の底津浪。げに道しある御代のためしを

右十八首京都府長福寺所藏

拾 月の國の御法を添て日本の世々に絶せぬ光ともがな

拾 鹽かよふ名にしあふてふわく水の。みちて道あるためしにぞ汲



拾 ちかひある法のながれの水薬師濁らぬ御代のまもりともがな

右三首京都市水薬師寺所藏

飲惠大 見てもしれ朝な夕なにいろそひて千代もかはらぬはなのおもかけ

右一首京都市泉山雲龍院所藏

惠皓雙 幾千歳吹風すゞし水清しどもなふ山の動きなき世に

右一首攝津國武庫郡山田村原野曹洞宗成道寺所藏

惠拾 木葉ちる秋の日數も諸ともに残りすくなき身のよはいとや

右一首攝津國清澄寺所藏

皓拾 柴の戸をさしていつとはわかねどもたゞくゝひなの折をこそまて

右一首大阪市生玉青蓮寺所藏又大阪下福島河野孝次郎氏所藏

皓 萬代も絶す盡せず諸人のあふぐ高野の峰の月影

皓 かげは今幾千代のひかりそふ高野のおくの法のごもし火

右二首和泉國泉北郡八田莊村家原寺所藏

雙 よろづ代も盡せじものを天地のひらけそめてし言の葉ぞこれ

右一首明石市林崎密藏院所藏

拾 いかなるか解脱の道とたづぬればひとしくこたふ我(我)の心

右一首廣島縣深安郡御野村法樂寺釋仁仙師所藏

拾 いまもなをありしながらの姿にて天何をかいふ己が春秋

右一首兵庫縣川邊郡小田村潮江金蓮寺所藏

飲惠拾 世に在ていま幾年か老の身の耻をもしらぬ面影ぞこれ

右一首京都西賀茂神光院所藏

拾 ありし世の商那が袈裟の跡とめてながくも法の命ともがな

右一首江州栗田郡安養寺所藏

草拾 神垣やいのるしるしのほごもげに草木のべふす秋の山かせ

右一首京都市清水四丁目淨土宗西光寺土川善徴師所藏

皓草惠大 心とも知らぬ心をいつのまにわが心とやおもひそめけん



右一首京都鞍馬口上善寺所藏。又大阪市清海復三郎氏所藏

惠大 み吉野の吉野の山の山櫻。花こそ花の主なりけり

大 このわろのうなづくまでは居り見よ。未生已前の眉目はいかにと

大皓 しら雲よ月よ櫻よ見るまゝに。萬代盡ぬおのが春秋

皓雙 このわろがこちらむくまですはり見よ。かつて藏さぬ己が面目

皓 これやこのさどらぬさきの悟こそ。まだまよひ見ぬ迷ひなりけれ

皓 花も見ん月も詠めん百年をたゞ父母のこゝろとはして

皓 仰げたゞありし昔のそれながら。ますみの鏡いまにくもらず

拾 かくまではおもひよらずも山住の峰のしら雲軒の月影

拾 にごりなき心をそれと見るまゝに。みだれそめてし瀧のしら糸

拾 朝夕のことにふれては見ても看よ。すべる坊主のおのが面目

拾 あさな〜いづる日影は我ためのことゝをしふる西の山端

拾 朝な〜出る日影は我ために。こゝとをしふる西の山端

拾 我法は一二三かそれならで。窓にことゝふ峰の松風

拾 百年三萬六千日かさねてしるし山のよそほひ

拾 草も木も己が姿と聞けばげに。にくゝもあるか秋の夕風

拾 海の外も道はたがはじ我國の少彦名の神のこゝろに

右十六首大阪市西區春日出町清海復三郎氏所藏

拾 立さらで守るこゝろの朝な夕な。わが七福の神います宿

右一首大阪市清海復三郎氏所藏。又大阪市一瀬爲三郎氏所藏

草惠大 これやこのさどらぬさきのさどりこそ。まだまよひ見ぬまよひなりけり

増 佛とは誰が聞そめて白糸の。むすびもとめぬ峰の秋かせ

拾 わけのぼる雲井の外もよそならぬ。迷をそれと知る道もがな

拾 見る物はあたらしきよしたゞ人は。ふりぬるのみぞよろしかるべく

皓拾 南無大悲これや心の盡しなく。衆生世界のあらん限は

右五首大阪市北區眞砂町一瀬爲三郎氏所藏



飲惠大  
暗葛拾

このころは峰の木がらし吹たえて。梢にのこる言の葉もなし

右一首大阪市一瀬爲三郎氏所藏。又大阪市西岡金十郎氏所藏

惠大暗

彼國の池の蓮の上ならで。浮世の中の名こそおしけれ

右一首大阪市北久太郎町二丁目西岡金十郎氏所藏

飲葛

こゝろともしらぬ心をいつの間に。わがこゝろとは思ひそめけん

右一首大阪市西岡金十郎氏所藏。又大阪市清海復三郎氏所藏

惠拾

山陰や路のぬかりのほど遠し。手馴ぬ駒に心ゆるすな

拾

摩尼寶はをのが心のすがたにて。げにうごきなき世々の人々

拾

谷のすがた山のおもかげ小夜ふけて。月にともなふみよしのゝ花

右三首大阪市下福島三丁目河野孝次郎氏所藏

草惠大

ほめばほめよそしらばそしれ。諸ともにあるかなきかのわかなくの世に

右一首弘前高等學校教授彌富演雄氏所藏

惠大

ひたすらにふすばらし見よ白鉢の。孔雀の咽の色となるまで

右一首大阪市黒川幸七氏所藏

惠

草か木かあらぬか露のおき添つ。夕暮深きあだしのゝ秋

右一首神戸市元町五丁目丹波謙藏氏所藏

大拾

をどりなき心を世々の寶にて。つきせぬ家のまもりとも見よ

右一首大阪市外玉出町森繁夫氏所藏

拾

をどりなき心を世々の寶にて。盡せぬ家のまもりとも見よ

右一首神戸市丹波謙藏氏所藏。又大阪市一瀬爲三郎氏所藏。又大阪市清海復三

郎氏所藏

拾

すゞしさはしる人もがな小夜ふけて。なかば過行秋の月影

右一首大阪市南區南綿屋町戸田孝作氏所藏

拾

よのなかを何にたごへん朝ぼらけ。すぎゆくふねのあとのしら波

右一首河内國南河内郡山田村北小路正作氏所藏

拾

をどりなきこゝろを代々の守にて。盡せぬ家の寶ともがな



右一首大阪府中河内郡高井田村辻本巳之吉氏所藏

拾 うつるとも月もおもはずうつすとも。水もおもはぬ廣澤の池

右一首河内國南河内郡長野町吉年善作氏所藏

拾 ひと雫末に倚きておのづから。舟を浮せしけふの樂さ

右一首大阪府中河内郡高井田村塚本四郎氏所藏

拾 立歸る波のまに／＼萬代も。なにしあふてふ和歌の浦風

右一首大阪市岡井榮三郎氏所藏

拾 萬代のはるをそれとや我宿に。吹も絶せぬ伊勢の神風

右一首大阪市某氏所藏

拾 無功德をそらにつたへて天の影。日の御かげぞとたゞ仰ぎ見る

右一首大阪府泉北郡高師町春日山土井宙氏所藏

拾 まよひこし道をいづことわかかねて。はかなく昨日今日とくらしつ

右一首大阪府土井宙氏所藏。又神戸市三宮町一丁目辻氏所藏

惠大拾 たづねずばありともこゝに山鳥の。長尾のおかの瀧のしら糸

右一首長尾の瀧の岩面に刻す

惠大拾 枯れ残る長尾の岡のすゝきばら。霜もしらけていとゞさむけき

右一首長尾岡不動寺跡の石碑に刻す

已上



慈雲尊者和歌索引

草 慈雲尊者御詠草

飲 飲明居士集慈雲大和上御歌

惠 惠日尼集雙龍大和上御歌

大 大和上様御詠

皓 皓月尼集尊詠寫

雙 雙龍尊者之歌集

葛 葛城尊者之歌集

増 慈雲大和上御歌増補

拾 慈雲尊者之歌拾遺

了

垢つけば

あかをくむ

秋津州

飲葛

拾



秋の末 惠  
 秋の露 惠  
 あけぬより 拾  
 朝な〜おき添ふ 惠大  
 朝な〜いづる日影は(我ための) 拾  
 朝な〜出る日影は(我ために) 拾  
 朝な〜出る日影は(よ〜とおしゆる) 拾  
 朝な〜見るにもあかぬ 雙  
 朝な夕な 皓  
 朝夕にちりも 惠皓  
 朝夕にわがなす 皓  
 跡たれて 皓雙  
 揚げたゞ 皓

天つ空 皓  
 天てらす 拾  
 天下 雙  
 雨風は 飲  
 天地の 雙  
 天地は 雙  
 あめの海 雙  
 天の御蔭 惠  
 雨ふるや 惠大  
 荒磯の 皓雙  
 あらゝぎは 皓雙  
 有し世の商那が(ながくも法の) 雙拾  
 有し世の商那が(ながく御法の) 皓

有し世の弓彌 皓  
 有馬やま 惠皓  
 有るなしを 草

イ

いかなるか 拾  
 いかなれば 飲  
 いかにして(法の道) 惠大  
 いかにして(世の人の) 草  
 いかにとき 飲葛  
 いかばかり 雙  
 いかるがや(くみても) 惠大  
 いかるがや(くみ見て) 飲葛  
 幾千とせ 惠皓雙

池の水 惠大  
 いざむかし 皓  
 石か木か 皓  
 異熟なり(羸劣) 皓  
 異熟なり(善惡) 雙  
 伊勢の海 皓  
 いたづらにすぐす 草  
 徒にすぐる 草  
 徒に過し 惠皓  
 徒に日數も 雙  
 一切衆生 惠大  
 いつくしみ 葛増  
 いつのまに 雙



いつまでも(影みて) 惠大  
 いつまでも(見てもこそしれ) 葛  
 いつまでも(見てもしれかし) 飲  
 いつも見よ 大  
 いつも見る 雙  
 いにしへも 皓  
 いにしへを 拾  
 家の風を 草  
 家の道たがひ 惠大  
 家の道むかし(たのみに) 草惠  
 家の道むかし(たがふな) 飲  
 今しばし 草惠  
 今はたゞ 惠

今までは 惠  
 今もなほありし 拾  
 今もなほ忍ぶに 惠皓  
 今よりは 惠  
 いむことの 拾  
 入舟の 皓  
 鶯の 雙  
 うごきなき國の 雙  
 うごきなき御代 惠大  
 うごきなき世々の(けむ) 葛  
 うごきなき世々の(ける) 飲  
 うごきなき世々の(ふる) 惠大

うし國も 草  
 うすくこく 大  
 有情非情 惠大  
 うち出でゝ 惠  
 うちつけに 惠大  
 内も外も 拾  
 うつしおきて 皓  
 うつしおく(流もたへず) 雙  
 うつしおく(その物部の) 拾  
 うつしつゝ 雙  
 うつしては我國ぞかし 雙  
 うつしては法の姿の 拾  
 うつるとも 拾

空蟬の 草  
 海原や天の 雙  
 海原や八重の 拾  
 海外も 皓  
 海の面そらも 惠皓  
 海の面山の 雙  
 海の外道も 惠  
 海の外も道はたがはじ 拾  
 海の外山のあなたも 惠  
 海の外山のあなたを 惠  
 海の月 惠大  
 海も山も(道かな) 飲  
 海も山も(道しば) 惠大